
魔法少女リリカルなのはs.CRY.eders

マメ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのは s ・ C R Y ・ e d e r s

【Nコード】

N07870

【作者名】

マメ

【あらすじ】

失われた大地で、己の拳のみでただ前を向き、ただ上を目指した男がリリカルなのはの世界にやって来る。

カズマの拳が今、ミッドチルダを大きく揺らす。

第一話・男、今旅立つ（前書き）

作者はこれが処女作で、しかもケータイ投稿ですがどうぞ見てやってください。

第一話・男、今旅立つ

男は今日も戦っていた。

男の周りには彼らがアルターと呼ぶ生物と機械を混ぜ合わせたような奇妙な物体がうじゃうじゃといた。

「本土の奴らいい加減しつこいんだよ！！」

そう叫ぶと同時に男の右腕が手の甲に蓋の付いた円盤のようなものがある山吹色をベースとした鎧に変化し、髪は逆立ち、右目のまわりには右腕と同じ色の爪のようなものが、肩には金色の螺旋を描く金属が現れた。

そして男が変化した右腕を構えると円盤の蓋が外れその中心が渦を描くように輝きだし、肩の螺旋も高速で回りだす。それはプロペラのように少しずつ男を浮かしていき

「シエルブリットバースト！！」

男が叫んだ瞬間に螺旋の中心から金色の光を吹き出した。

男はその光で爆発的に加速しアルターに突っ込んでいく。男の拳とアルターが衝突した時、金色のエネルギーでできた柱が立ちのぼり、その光に巻き込まれアルターは消滅していく。

そこで男はあることに気がついた、空間にワープゾーンのようなものが出来ているのである。

「ん、また向こう側が開いたのか」

男が使っている力も融合装着型と自立可動型の違いはあるがアルターである。

アルターは向こう側と呼ばれる別世界から力を引き出して使うため、

強いアルターを使うと稀に向こう側への扉が開くのだ。

「まあそのうち消えるだろ。」

実際今までもそうだったので男はその場を去ろうとしたのだが、扉が急に広がりだし、男を飲み込もうとした。男も急な事に反応しきれず、「なに！」そのまま向こう側の扉に飲まれていった。

その日、失われた大地から一人の男、カズマが消えた。

ロストグラウンド

カズマ、設定（前書き）

カズマの設定を少し。でもアニメ本編から引っ張ってきただけ。

カズマ、設定

名前：カズマ

【17歳】

スクライド本編^{アニメ}の最終回でかなみと別れてから1年後のカズマ（エ
ンディングのかなみが成長した時のカズマではない）。

アルターを使う時だけ髪が逆立つ

右目は第二形態から開くが普段と第一形態では開かない。

アルター名

『シエルブリット』

実はこれはカズマのアルターの第二形態のみの名前で第一形態の名前は不明（アニメ本編しか見てない作者が知らないだけかもしれないが）

一話で使ったのはこの形態。

肩の螺旋状の羽？プロペラ？のようなもので飛べるが長距離移動には使えない。

作者が素人なので「カズマはこんなに頭使わない。」というふうになるかも。

第二話・カズマ、大地に立つ（前書き）

改行などを改善してみた。

しかし二話目でも全く話が進まない？

第二話・カズマ、大地に立つ

カズマは気がつくとも森の中にいた。

「な、どこだここは、向こう側……てっわけでもなさうだが、チツ、何がどうなってやがる。」

だがカズマの問いに応える者がいるはずもなく、ただ静かな時間だけが流れた。

「とりあえず、ロストグラウンドかどうかは確かめねーとな。よし、まずはそれからだ。」

カズマの考えた計画はやはりいたってシンプルなものだった。

ここがロストグラウンドなら今までと変わらない、本土（ロストグラウンド以外の日本の領土）側から来るアルターからロストグラウンドを守る生活に戻るだけ。

ここが本土なら敵の本拠地を正面からその拳で叩き潰しに行くだけである。（ちなみにカズマは本拠地はおるか本土の首都の場所すら知らない。）

ただ、どちらにしる彼のやることは一つである。

“ケンカ売ってきた奴らを叩き潰す”

自分たちロストグラウンドに住む者達に、いや、自分にケンカを売

つてきた本土側をそれを買った自分が徹底的にボコリ後悔させてやる。

それがカズマの生き方であり譲れないルールでもある。

しばらく歩くと見晴らしが良い場所に出る。

少し遠い所に街のようなものが見えた。

「んな!!」

だが街が良く見える位置に立つと流石のカズマも言葉が出なかった。自分の知る“街”とはあまりに見た目がかけ離れているのである。街だという事は分かるのだが自分の知る街はここまで未来的な形はしていなかった。

ロストグラウンドはもちろん本土側でもこんな街は無い……と思う。

そしてカズマは本能のままに叫んだ。

「どこなんだよここはよぉ~~~~!!!!」

やはり応える者は居らず再び静寂な時だけが流れた。

第三話・交わる道（前書き）

やっとクロスオーバーっぽくなってきた。

第三話・交わる道

・時空管理局機動六課

（一時間前）

「次元震が観測されました。第六課局員は直ちに現場へと向かってください」

局内に緊急時のアナウンスが鳴り響いた。

その十分後、とある部屋では二人の新人局員がその上司と思われる局員に今回の次元震の事について呼び出されていた。

「…ということではあなた達には周囲への影響の確認、一樣無いと思いますけど時元漂流者が居ないかどうかを確かめてもらいます。」

上司の局員が再度任務の内容を確認すると新人局員の一人が手を挙げた、

「何ですか？」

「今回の任務なんですけど本当に私たち二人だけで大丈夫いいんですか。」

「不安ですか？」

「それはまあ。」

「まあ本当は隊長・副隊長クラスが一人ついて行くんですけど、今は全員忙しいので。でも大丈夫だと思いますよ。今のところガジェットの反応もないですし。それに今回の任務はあくまで下調べみたいなものですから。」

「分かりました。変なこと言ってすいません。」

「いいえ、任務ではそういう疑問を抱くのは大切なことです。特にあなたのようなポジションでは。じゃあ初任務頑張ってください。」

「はい。」

そして現在、二人の新人局員は森の中を歩いていた。

「初めての任務でただの現地偵察とはいえあんと二人だけなんて大丈夫かしら。」

と、少し不安そうにオレンジ色の髪をした少女がつぶやく、

「も〜心配性だねティアナは。」

何が嬉しいのかニコニコしながら青い髪の少女が応える。

「あんと違って私はいろいろ考えてる事があんのよ、このバカスバル。」

「ひどいな。それにしても初任務だよ初任務、ワクワクしない？」

「はあく、そういうところがバカだって言ってるのよ。」

そんな感じで雑談（スバル八割、ティアナ二割）しながら次元震があつた場所に向かって森に進んでいく。

そして次元震があつたといわれた場所に着くとなんだかんだいって真面目なスバルはティアナと共に着々と調査を進めた。それが一息ついた頃、

「こんなもんかしら、思ったより被害はなかったわね。」

「あれ、もう終わり？」

「まあちょっと拍子抜けよね。」

「そうだ！この先に景色の良い場所が少しあるからよっていいじよ。」

「少しだけよ、少し。」

「わかってるって。」

そう言うと、スバルは持ち前の脚力で突っ走って行った。その様子を見たティアナは呆れて、

「いや、どんだけ行きたいのよ……」

と、呟いていた。だがあの純粹さはある意味うらやましいとそんなことを考えていると、スバルが慌てて戻ってきた。

「お、男の人が倒れてた。」

「な、！」

ティアナもその言葉を聞きスバルについていった。

（こんな場所で倒れてるなんて次元震と関係ないとは思えないわね。）

そして現場に着いたらしく、スバルが指を指した場所には男が倒れ、いや、かすかないびきをかいて寝ていた。

「……………」

ティアナはスバルの慌て様からもつとケガをしてるとかそういう現場を思い浮かべていたのでどことなく拍子抜けしてしまった。それに気づいたスバルは、

「ほ、ほら、倒れてることに変わりないじゃん、ね。」どことなくフォローを入れる。

「いや、別にいいけど。あんたが起こしなさい。」

「うん、わかった。」

スバルがしゃがんで男の肩をゆすりだすがなかなか起きない。
その間、ティアナは男の服装などを観察していた。

（この辺では観ない格好ね、年は私たちより一・二歳上ってところ
かしら。）

side:カズマ

カズマは爆睡していた。

ここ数日は本土側と闘っていてまともに寝ていなかったのが原因
だ。

だが寝苦しくなってきたので跳ね起きたその瞬間。

ゴチーン！

頭にもものすごい衝撃があった。

おもわず頭を押さえてうずくまるカズマ。

近くに同じく頭を押さえてうずくまる青い髪の少女がいたのはいう
までもない。

第三話・交わる道（後書き）

やはりケータイで書くのはしんどいですね。

こんな駄文でも一から作ると二時間近くかかるとは。

第四話・在り方（前書き）

会話ばかりのバカ野郎な文章だぜ。

珍しく少し話しが進んだんだぜ。

第四話・在り方

カズマはイラついていた。久々に爆睡していたのに何者かに起こされたからだ。しかも頭突きまでかまされた（故意ではない）。

カズマは目の前の二人の少女（一人は地面に屈み込んでいる）に怒鳴る。

「いってゝな、おいこら！」

ティアナは目つき悪いな〜と思ったがとりあえず次元震に関係あるか聞いてみる。

「いや、私たちは」

「何なんだてめ〜ら、ケンカ売ってんのか、あ〜ん。」

「だから私たちの話しを」

「ケンカなら買うぞ、そんでもってここが何処かはいてもらうぜ。」

「ちょっとまってください。今、何と？」

「何がだ、ケンカなら買うって言ったんだよ。」

「その後ここが何処かとか言ってますでしたか。」

「言ったぜ、だから何だよ、まさか教えてくれるってのかい。」

「はい。私たちの質問に答えてくれるなら。」

「チツ、何だよ、いいぜ言ってみな。」

「まず、何故こんな所に？」

「知るかよ、気がついたらここにいたんだ。」

「その前は何処に？」

「ロストグラウンドだ、あんたも聞いた事くらいあんだろ。」

ティアナはそんな所聞いた事も無かったが男の口振りからすると常識であるように聞こえる。そこから一つの可能性が高いと思い、次の質問をした。

「元いた場所、ロストグラウンドでしたっけ、そこで爆発のようなものが有りませんか？」

「ん、まあ有ったっけ、起こしたっけ…」

「有ったんですね。」

「有ったよ、有ったから何だ。」

そこでティアナはスバルに念話で話しかける。

（スバル、多分この人は次元漂流者の可能性が高いわよ。）

（え、次元漂流者で、あの？）

(多分ね、とりあえず立ちなさいよ。)

スバルもやっとな涙目になりながらも立ち上がる。

「お、もう一人居たのか。で、結局ここは何処なんだ。」

ティアナは一息おくと話し出した。

「ここはミッドチルダ、おそらくあなたの居た世界とは別の世界です。そして私たちはあなたのような人を次元漂流者というのですが、その次元漂流者を元の世界に帰す時空管理局という組織に所属しています。」

「じげ、じく、…あゝもうわけわかんね〜よ。何が言いて〜んだ。」

「私たちについて来て下さったら元の世界に帰れるかもしれないということですよ。」

カズマは少し悩みそして口を開く。

「お前、名前は、」

「私はティアナ・ランスター、こっちの青いのは」

「スバル・ナカジマですよしく。」

「オーケー、刻んだぜお前らの名前。ティアナとかいったな、今んとこお前を信用してやる。だからそのなんとか組織つてやつのに連れてけ。」

どうやら分かってくれたようでティアナはホッとした。実は内心けっこうびびっていた（カズマの目つきやしゃべり方）がよくよく考えると一般人に負けるわけないと、今になって気づいた。

「じゃあ案内します。機動六課まで。」

そして三人は歩き出した。

カズマは機動六課に着くとすぐに（ティアナが道中連絡を入れていた）この部隊のトップの部屋に通された。そこにはおそらくこの部屋の主だと思われる茶髪の女性とその護衛なのか桃色の髪をした女性がいた。

そしてカズマが席に座ると茶髪の女性が話しかけてきた。

「私の名前は八神はやて、この部隊の責任者です。そしてこちらがシグナム、私の護衛をしている騎士です。」

「俺はカズマ、ただのカズマだ。後、堅っ苦しいしゃべり方はやめてくれ、ていうかやめろ。」

はやては少しポカンとすると、急に軽く笑った。

「ティアナの報告どうりの面白い性格やな。まあそっちがそういうなら素のしゃべり方でいかしてもらっよ。」

そこまで言って少しだけ真面目な顔に戻る。

「うちの組織はいろんな世界を管理してる組織なんや。まあ管理ゆうつても何かあったら力を貸すって程度やけどな、そんでいろんな世界の情報が入ってくるから、あんたの居た世界がその中に入ったらうちらがその世界に帰してあげるってわけや。」

「つまり俺は何すりゃいいんだ。」

「まあまず元いた世界がどんな所か話すんや。じゃないと探しようがないからな。」

そしてカズマは元いた世界で自分が知ることをしゃべった。ロストグラウンド、アルター、その能力者、その他様々なことを。そして全てを話し終わった時、はやてが

「アルター能力か、そんなもんがある世界はさすがに見つかったないわ。ごめんな。」

「なっ、てめゝふざけんな。」

「まちゝな、探さんとは言ってへん。それだけ情報があればいつかは見つかる。それに衣食住は私たちが面倒観たるから気長に待てばいいよ。」

他に当てが無いのでカズマはここまで言われると何も言えず、

「わゝったよ」

「あっ、それとアルター能力やつけ、それも見たいから訓練場に行こか。」

その言葉を聞いたシグナムは見た目と違い内心つづつずしたとかしてないとか。

第五話・衝撃のファーストハンマー（前書き）

誰と闘うかバレバレのタイトル。

あ、ビフ君は出ませんよ。

あと、後書きのテンションがおかしい。

第五話・衝撃のファーストハンマー

訓練場に着くとそこには数人の局員が集まっていた。全員カズマとはやてを見ている。

「はい、注目や。この目つき悪いのが今回保護する事になった次元漂流者や、確か名前は…カズヤやっけ？」

「カズマだ！」

「わかっとなるって、まあそのカズマがアルターとかいう変な力持つとるちゅーことで模擬戦でそれがどんなもんか試すんやけど、さあどんなスタイルの人と闘いたい？」

「俺は真っ正面からぶつかってくる奴がいいな。少なくともそいう奴の方が楽しめそうだ。」

その時シグナムが手を挙げ、

「主、私にその模擬戦を「ヴィータでいいんじゃないかな。」

フェイトにさえぎられ、

「あの私に「ヴィータちゃんが一番それっぽいよね。」

なのはにさえぎられ、

「わた「じゃあヴィータに決まりやね。」

信じていた主にさえぎられ彼女は沈んだ。

「でそのヴィ、ビ、ビフだったか？そいつはどいつだ。」

「あたしだ、あとヴィータだ間違えんな！」

カズマは驚いた。自分と同じような戦い方をする奴なら思いっきり殴れると思いを指名したのだがこんなガキだとは思わなかった。しかも女だ（よく見れば周りは女だらけだが）。

カズマは見た目と違って子供にはけっこう優しいのである。

「こんなガキと闘えつかよ。」

（（（言っちゃった）））

この場に居る全員の思考回路が一致した瞬間だった。もちろんヴィータがこれを聞き逃すわけもなく、

「誰がガキだ誰が、名前間違えるしガキ呼ばわりするし、てめえぜってーぶっ飛ばしてやる。」

「いいぜ、そこまで言うならやってやらあ。」

そしてその十分後、二人以外はとりあえず邪魔にならない所に移動し、残った二人がお互いに距離をとり模擬戦が始まった。

「先手必勝！！」

ヴィータがハンマーの形をしたデバイスを出し一気にカズマに突っ込んでいく。

「おっしや来い！」

そう叫ぶとカズマの右腕が金色をベースにした鎧に包まれていった。そして右肩には紅の羽のような三枚の金属が付いていた。

この状態こそが彼のアルターの最初の姿である。そしてカズマは右腕を振りかざし向かってくるハンマーを思いつき殴り勢いを止めた。

「な、やるじゃねーか。」

ヴィータは並みの魔術師ではとても防げない力と魔力を込めてデバイスを振ったのだが目の前にいるこの男はいとも簡単にそれを止めた。つまり全力を出しても大丈夫な相手だとわかる。しかも自分と同じ接近戦で相手を叩き潰すパワータイプだ。

「カズマとかいったな、あたしは手加減なんかしねーぞ。」

「当たり前だガキ、むしろこっちがしてやりてえくらいだぜ。」

二人ともわずかだが口がゆるむ。

そして

「「オラアアアアアアア」」

再び拳とハンマーがぶつかり合った。

「いや〜、すごいなああの右腕、ヴィータの攻撃を止めたで。シャーリー本当にあれデバイスとちゃうの？」

「はい。見た目はデバイスとそう変わらないですが中身が全然違います。まず魔力を使ってませんし、コレを観て下さい。」

シャーリーがモニターに映像を移すと、なのはやフェイト達もモニターに注目する。そこにはカズマの右腕が変化した時の映像が流れていた。

「よく観るとカズマさんの右腕はデバイスと違いこのように鎧に包まれるというより鎧と融合しています。デバイスを出すというより腕だけ戦闘機人のように補強している状態かと思えます。」

「なるほどね〜。」

カズマとヴィータは再び距離をとる。

「おい、そろそろ全力でぶつかろうぜ、てめえのその獲物と、俺のこの拳でお。」

「カ比べか、あたしはぜってー負けねーかな。」

そついい二人は構え直す。

「衝撃の」 「カートリッジロード」

カズマの肩の紅の羽が一枚砕け始める。

ヴィータのデバイスからカートリッジの薬莖やっきょうが飛び出る

「ファーストブリットオオオ」 「ぶち抜けええええ」

カズマは砕け始めた一枚の羽を緑色のエネルギーに変え、

ヴィータはハンマーの片側にカートリッジで上乗せした魔力を込め、

両者共に光を一気に爆発させた。

カズマは肩から吹き出す緑の光で、

ヴィータはハンマーの片側から吹き出す魔力で、

それぞれ回転しながら相手にぶつかっていく。

そしてカズマの拳と ヴィータのハンマーがぶつかり合った時、

ドゴーン！！！！

爆音が鳴り響き土煙が上がる。

土煙が消え、両者共に立っているのが見える。

「俺の勝ちだな。」

「ああ、あたしの負けだな。」

よく観ると

カズマの拳はわずかだが欠け、

ヴィータのデバイスは柄の部分から折れていた。

「それなりに良かったぜ、“ヴィータ”。であってたか名前。」

「お前もそれなりに良かったぞ。あたしほどじゃないけどな、カズマ。であってたか名前。」

「言ってるガキ」

そして馬鹿らしくなったのか二人共笑い出した。

その様子を見ていたなのはとフェイトは

「仲の良い兄妹みたいだね。」

「やっぱりなのはにもそう見える?。」

「うん。あ、戻って来たよ。」

ヴィータはすぐさまはやての元に行き、

「ごめんはやて、負けちゃった。」

「ええんよ別に、それよりもなんで空飛ばんかったん？」

「なんかさ、避けちゃだめだっていうか、とにかく理屈じゃないんだ。」

「まあヴィータが満足そうだからいいんじゃないかな。」

と、フェイトが助け舟を出す。

そこではやてがあることに気付く。

「あ、カズマに機動六課のメンバー紹介すんの忘れとったわ。紹介するな、まずは……………」

こうしてカズマの最初のケンカは終わった。

第五話・衝撃のファーストハンマー（後書き）

ヴィータはハンマーなのと回転して突撃する技があるのでカズマが最初に闘うのは彼女と決めていました。

恐ろしいくらいカズマと相性が良いと思う。

性格とか、戦い方とか、ロリとか、ハンマーとか、

ぼくの玉をくはさすがに止めましたが、

ヴィータは玉出す技といい、本当にスクライド大好きですね。

作者は彼女以上にスクライド大好きなので頑張ってこの話を無事完結させたい。

感想待ってます。

第六話・これから（前書き）

はやての使い方があってたか不安

第六話・これから

一通り機動六課との自己紹介（一方的に）が終わった頃、なのははカズマがじつと自分を見てることに気付く。

「えっと、なにかな」

「ん、ああ、ただ「一目惚れか、そうやる、そうなんやる。ハツハツ八弱みを握ったで。これ私の天下ええええ痛い痛いってえ。」

カズマはムカついたので右手ではやての頭をボールのように掴む。

「てめえ、少しくらい黙ってられねえのか！」

「関西人の血が騒いだんや。

“意地があんのや関西人にはなあ”。

「そつかい。じゃあその血を搾り取ってやるよ」

“メキツメキ”

「あああああ」

カズマが右手に力を込める。すると彼女の守護騎士であるヴィータとシグナムが駆け寄ってくる。

「こらカズマ、はやてを離せ」

「すまんが主を離してはくれんか」

「てめえらがコイツを黙らせれるなら離してやるよ」

「……………」

彼女を守る為の騎士達は何も言えなかった。

「裏切り者おおお」

なのはは流石にはやてがかわいそうだったので話を振る。

「えつと何の話しだったけ？」

「ああ、お前がちょっと前まで一緒に住んでた奴に瓜二つってだけだ。特に声とか区別がつかねえ。」

「そんなに似てるの？」

「ああ、マジでそっくりだな」

「そんなに似とるんやったら馬鹿魔力まであるかもな、カズマの世界見つけたら時空管理局に誘ってみるのも良いかもしれへんね、”ミシツ” “バキツ” みぎいいいいい。」

「てめえ、かなみに手え出したらぶつ殺すぞ。」

「ねえ、馬鹿魔力って何のことかな？」

「な、なのはちゃんまで叩くことないやん。」

「なあ、もうコイツまかせていいか。」

「いいよ、カズ君。でいいよね?」

「勝手にしろ。」

「イヤアアアアア。」

“カズ君か、呼び方まであいつにそっくりだな、たぶん止めろつつても呼ぶの止めねえところも同じなんだろうな、

「イヤアアア止めてええええ」：あんま性格は似てねえみたいだが”

「おいカズマ」

「何だよヴィータ」

ヴィータが何か言いたそうにカズマに近づいてくる。

「さっきの鬪いあたしは負けたわけじゃないからな。あたし達はリミッターで力を抑えてるんだ。だからあたしの全力はもっとすごいんだぜ」

「へえ、そりゃあ楽しみだ。まあ俺も全力つてわけでもなかったしな」

「な、本当かよそれ。なあなあ見せてみるよ。」

「いいぜ、おらあああああ。」

カズマが叫ぶとカズマの右腕が輝きだす。そして現れた右腕は先ほどの金色ではなく山吹色がベースの割れ目がある鎧が、手の甲には同じく割れ目のある円盤が付き、肩の部分は紅に染まりより大きさが増す。

紅の羽の代わりに金色こんじきの螺旋を描く独楽どくらくのような金属が、今まで閉じられていた右目が開きその周りに鬚たてがみのような鋭い金属が付く。

これこそがカズマのアルターの第二形態 “ シェルブリット ” である

「マジかよ、」

ヴィータはどこかくやしそうに驚いているがカズマは不満そうだった。

「なんでシェルブリットなんだ？」

「ん、どうしたカズマ？」

「ホントはもつと上があんだが出せねえんだ」

「まだあんのかよ」

これはアルターの力の仕組みに原因がある。

アルターは魔法でいう魔力の部分を “ 向こう側 ” と云われる別世界から引つ張り出して使う。 “ カズマの居た ” 地球 よりもミッドチルダは向こう側が物理的に遠いのでアルターが引き出しにくくなっ

ているのであるが、カズマ達にそれを知る術はない。

カズマのシエルブリットの光を見て今度は赤い髪の少年がやって来た。

「あれ、その右腕さっきと変わってませんか？それに右目も、
と赤い髪の少年が聞く。」

「ん、シエルブリットってさっきの一つ上のアルターだ。えっと」

「エリオですよ。さっき自己紹介したばかりじゃないですか。」

「ワリイな、どうも名前ってやつを覚えるのは苦手だな。右目は何か知らねえけどコイツ使っと開くんだ」

名前に関しては彼に戦い方を教え、彼が兄貴と呼んでいた男譲りか、ただ単に忘れっぽいかのどちらかである。

「そのシエルブリットでしたっけ？それはどのくらいの威力何ですか？」

言葉は丁寧だがやはり男の子なのか先ほどよりも目が輝いて見える。

「俺がこっちに来た原因の爆発起こすくれえだな。」

「次元震をですか！！」

「その話し聞いたでえええええ」

復活したはやてが話に割り込む。

「おい高町、コイツ全然こりてねえぞ。」

「ごめんカズ君。途中で逃げられたの。」

ヴィータとエリオが懲りないなあと思っっているとはやてが、

「今回は真面目な話しやねんて。カズマ、さっきその手で次元震起こせるって言うてたけど、こっちに來たのもそれが原因何か。」

「まあ爆発起こしたのは俺だな、言うてなかったか。」

「少なくともうち聞いてへん。それでな、次元震を起こすってのは軽く犯罪やねん。そこであんたがうちの民間協力者って立場になつて仕事手伝ってくれるなら上への報告誤魔化したるけど。」

「脅しかよ、上等じゃねえか。誰かに縛られて生きるくらいならその上つて奴らとやり合った方がマシだ。」

「そんなことしたら元の世界に返られへんで。それに仕事ゆつてもあんたの場合闘ってもらっただけでいいんやけど（うちの予想ではシグナムと同じ戦闘狂っばいしこれでいけるやる）。」

はやての予想は当たり、カズマはその言葉に悩む。ロストグラウンドで別れたかなみとの約束があるため返れないのは困る。それにどうやら自分のやることは闘っただけらしい。よってカズマの出した結論は、

「俺何か使つて後悔すんなよ。」

「契約成立やな。」

今ここにカズマのミッドチルダでの道が決まった。

第七話・日常、模擬戦、ケンカ（前書き）

スバル＋ヴィータ＋シグナム÷3 〓 カズマ

はやて＋ティアナ÷2 〓 君島

なのは－カ＋健気さ＋純粹さ＋カズ君＋ロリ〓 かなみ

第七話・日常、模擬戦、ケンカ

カズマが起きるのは基本的に9・10時くらいだ。そしてひとまず食堂に行く。カズマはこの飯がロストグラウンドと比べものにならないくらいうまいと知ってから食堂は訓練場の次に気に入っている。

次に向かうのは訓練場だ、というか彼は基本的に訓練場と食堂以外の場所を知らない。

そこに入ると新人達がなのはにボコられ、もとい訓練を受けているのが見える。(本人達いわく訓練だがカズマには一方的にボコられるようにしか見えない。)

その次にシグナムと目が合う。するとシグナムはこちらに近寄ってくる。その目はどこか血走って見える。

「カズマ、私と模擬戦をしろ。」

「模擬戦？何だそりゃ」

「お前とヴァイターがやっていたのと同じだ。」

「あああれか、いいねえやってやるうじゃねえか。」

その言葉を聞きシグナムは構える。

カズマもそれに応え、アルターの発動させる。

ちなみにアルターの発動時に分解される物質ははやてがエコとかいって持ってきたいらなくなった機材である。

そしてもう機動六課の名物に成りつつある“シグナムと新入りの模擬戦”が始まった。

五分後

「やはりやり方はきにくわんが。」

シグナムのつつた行動は単純だった。

ただ空を飛ぶそれだけだ。

カズマの今までの戦い方から考えるに近接戦闘しか出来ずおそらく空も飛べない。よってあくまで空は自分の領域、だがその考えが油断を生んだ。

「おつりやああああ」

カズマはシグナムが飛んだ瞬間その右腕で地面を殴る。するとカズマの体がその反動で空高く舞い上がる。

「なっ、」

「衝撃のおお」

シグナムはとっさに体制を立て直す。

「ファーストブリット」

カズマが流星のごとくシグナムに突っ込んでいく。
シグナムは何とか直撃は防ぐが地面にたたき落とされた。

カズマは地面に着地して倒れているシグナムに話しかける。

「おい、てめえはさっきのでやられるほどやわじゃねえだろ。」

カズマの言葉に何事もなかったようにシグナムも立ち上がる。

「ああそのとおりだ。それにしても退屈させない男だなお前も、テスタロッサ以来だ。」

「そのテスト何とかったのは知らねえが、てめえもなかなかだ。」

「それは光栄だな。」

「じゃあ、続きをやるか。」

「ああ私は最初からそのつもりだ。」

「さあ、もっと俺（私）を楽しませろ！」「」

戦闘狂である二人の闘いは始まったばかりである。

（一時間後）

二人は一步も動かずただ立っていた

「ハアッハアッハア」

「ハアまだ立つのかよ、てめえみてえに頑丈な女は初めてだ。」

「フツ、私こそ貴様のようにしぶとい男は初めてだ。しつこい男は嫌われるぞ降参したらどうだ。」

「はっ、冗談、そんな理由じゃあ退けねえなあ。あんだだってそう
だろ。」

「ああ今更私も退けん。カズマ、シエルブリットを使え、私は本気
のお前と闘いたい。」

「リミッターとかいうやつ外すつてならいいぜ。俺の本気が見たけ
りやまずはてめえが本気でかかってきな。」

「あれを外すには許可がいるからな、まあいい、無理矢理にでも使
わせてやる。」

「上等だあ、やってみろよ。」

そして二人が前に一步踏みだそうとした時、

「ゲフツ」

なのはの砲撃で吹っ飛ばされたスバルがカズマに激突した。

スバルは思ってたより痛くないなあ〜などというベタな事を考えて
いざ目を開いてみるとカズマが下敷きになっていたのでそれはもう

慌てた。

「あっあ、あのすすいませんでした。け、怪我は無いですか、あっ全身ボロボロじゃないですか、私のせいでこんな、えっとどうしよう、どうしたら」

スバルの慌てようがすごかったのでシグナムが声をかける。

「少し落ち着け、コイツの怪我はほとんど私との模擬戦でできたものだ。」

「えっ、そうなんですか。で、でも私がぶつかってえっとその。」

「コイツは私がかするからお前は戻っていいぞ。」

「は、はい。本当にすいませんでした。」

言い終わると同時にスバルは他のメンバーの所に戻っていった。

「大丈夫か？ほら、立て。」

シグナムはカズマに手をさしのべる。

「おう、」

カズマはその手を掴み立とうとしたが、

「うわっ」「」

シグナムのボロボロの体がそれに耐えれず二人共地面に倒れた。

「何だよ。てめえこそボロボロじゃねえか。」

「お前ほどじゃないがな。」

「はっ、よく言っぜ。」

・
・
・
・

「なあカズマ。」

「何だよ。」

「ここまで楽しめた模擬戦は初めてだ。…もしよければ時々こうやって私と模擬戦をしてはくれないか？」

「嫌だね。」

「…そうか。」

明らかに落ち込んだようにシグナムが言う。

「模擬戦なんて堅っ苦しいのはごめんだが今日みてえなケンカならいいぜ。」

「ケンカ？」

「ああケンカだ。」

てめえも俺も自分が楽しみてえから、相手に勝ちてえから闘ったん

だ。

模擬戦なんて上等なもんじゃねえ、ただのつまんねえ意地の張り合い、どうだ、ケンカで充分だろ。」

「ふっ、ああそうだな、言い直すよ。」

時々でいいから私とケンカをしてはくれないか。」

「ああいいぜ。またやろうぜケンカをよお。」

「ああ。」

「（ケンカか、騎士がケンカなど考えた事もなかったが。こういうのも悪くはないな。）」

そして両者共に疲れに負け、眠りについた。

カズマとシグナムのケンカ： ドロー

（翌日）

「カズマ、早速だが昨日のケンカの続きをしてもらうぞ。」

「「「！……！……！」」」

「おっ。」

「あかん、シグナムがカズマに洗脳されとる。」

「でも楽しそうだし私は良いと思うんだけどなあ。」

「うん。私もシグナムがあそこまで楽しそうなの見たこと無いし。」

「あかん主として、いや保護者として洗脳から解き放つたらなあかんのや。」

「でも邪魔したらシグナムだけじゃなくてカズ君も怒ると思うよ。」

「……………（頭絞られるのは嫌やなあ）。本人が良いなら良いか。」

「うん。それが良いと思うよはやて。」

こんな隊長三人の会話があったとかなかったとか。

第七話・日常、模擬戦、ケンカ（後書き）

前回のあとがきを忘れてたがカズマの第三形態以降は強すぎるので使えなくした（今は）。

八神家がよく出るのは前書きの式のせいです。

第八話・ファーストミッション（前書き）

最近忙しくて更新が遅れ気味になりやすい。

でも11月はもっと忙しい、泣けてくるぜ。

第八話・ファーストミッション

俺は今、こっちに来て初めての依頼（本来は任務だがカズマは依頼と言っている）の場所に向かうため、ヘリとかいうバラバラうるさい物に乗っている。

俺はコレを最初に見たときかなみの居た村を襲ったクソ野郎が乗ってたヤツに似ていてむしゃくしゃしたので蹴ってやった。

すると男が怒鳴りながら降りてきた。確かヴァ、ヴァ……

「てめえ名前何だった。」

「だからヴァイスだって言ってるだろ。」

何回目だこのやりとり。」

とりあえずその男の物だったらしくケンカ売ってきやがった。

…2秒でボコった。

ボコったのはいいがこいつが依頼の場所に俺たちを運ぶ奴だったらしく、高町たちにバレてゴチャゴチャとうるさく怒られた。

特に高町はかなみと声がそっくりなのでたちが悪い。

「もう、ちゃんと聞いているですか？」

「聞いてるって」

カズマは今プカプカ浮いてる小さな人形？にまで怒られている。

「じゃあ任務の内容は何ですか？聞いてたなら答えられるはずです。」

「てめえらが何かしてる間俺は変な機械をボコる。」

「むう、間違ってますけど納得も出来ません。いいですか、今回の任務はレリックというロストログアを運んでいた貨物列車がガジェットに……………」

そんな会話（カズマは途中から聞いてない）をしているとフォアードの一人がかすかに震えているのが見えた。カズマはその震えている奴の元へ近づく。

「お前、名前は」

「え、キャロ、……………です。」

キャロは突然カズマに話しかけられ動揺した。

話したことは無いがキャロの中でのカズマのイメージはどちらかといえは不良に近いものだったからだ。

だが次にカズマからかけられた言葉は想像したものとは少し違った。

「そうか、でっお前今怖えのか。」

「はい、初めての任務なので少し。」

「そうかい、だがなそういう時は外見に出さず強がってみな。」

「えっと、何ですか？」

「恐怖は他者に伝染する。だから自分がこの流れを変えてやるって
くらいの気持ちでいろ、そして周りもビビらなくなるし気が付い
たら自分もビビってねえはずだ。」

カズマはキャロの頭に手を置き言う。

「出来るか？」

「は、はい。」

「そうか、ならいいんだ。」

それだけ言ってカズマは元の場所に戻っていく。

この会話でひとついえることはキャロの中のカズマのイメージは少
しだが変わった。

その様子を離れて見ていたのはとヴァイスは

「カズ君って優しいのか厳しいのかよくわかんないんだよね。」

「とりあえず不器用なのは確かですけどね。」

「だよね、もう少しくらい素直に成ったらいいのに。」

「そんなあいつは自分には想像出来ません。むしろしたくありません」

ん。」

「ははは、でも私は良いと思うんだけどな。ああいう不器用だけど優しい人も。」

「あんなんがタイプなんすか!！」

「ち、ち違うよ、人として好きって意味だよ。」

という会話をしていたとか。

〜20分後〜

へりは目標の列車の真上まで近づいていた。

「さあ着いたぜお前ら、空は隊長達が抑えてるからお前らは目標に専念しな。誰から行く?」

ヴァイスの声にかズマがいち早く反応する。

「俺だ、」

「よしわかった。じゃあ今扉を、」

「その必要は無え。」

次の瞬間かズマの右腕が金色の鎧に包まれる。……………分解され朽ち

果てたへりの扉という犠牲を払って。

「な、ため「じゃあ行くぜ。」

さらにカズマはへりの壁をその右腕で殴りつけ勢いよく列車に向かって飛び出す。

「あの野郎へりに恨みでもあんのか、」

ヴァイスが怒鳴るがもちろんカズマには聞こえず虚しくこだまするだけである。

そのカズマは列車の天井に右腕を突き刺し、それを軸に回転しながら衝撃を逃がし着地した。

その音を察知したのかこの列車に居たほとんどのガジェットがカズマの周りに集まっていた。

「三下がわんさかわんさか、楽しめそうじゃねえか。」

そしてカズマは右腕を構える。

「衝撃のおおファーストブリットオオオオ」

一方カズマとは別に列車に侵入したエリオとキャロは着々とガジェットを撃退しながら車両を進んでいた。

そして今度は今までよりも大きなガジェットが道をふさぐ。

エリオは気を引き締め突撃するが槍の刃は全く刺さらない。

「こいつ、他のより堅い。」

そして再び突撃しようとしてデバイスに魔力を込めた瞬間、あろう事かガジェットはAMFを発動させた。

「っ広範囲のAMF、がっ」

大型ガジェットがベルトのようなアームでエリオに襲いかかる。

なんとかエリオは魔力の込もってないデバイスで受け止めるがそれも限界がある。

キャラは焦っていた。

AMFのせいでエリオはおろか自分も魔法は使えない。自分はただ見てることしかできない。

そしてとうとうエリオが意識を失いガジェットのアームのよって崖の下に放り投げられる。

その瞬間気が付いたらキャラはエリオに向かって崖を飛び降りていた。

「（本当はすごく怖い、だけど）あそこで怯えてるだけじゃ誰も守れない。守ってもらってばかりは嫌だから、だから今度は私がこの人を助ける。」

そして彼女はエリオの元にたどり着き自身の全てを賭け少年を治療

する。

もう一匹のパートナーである龍、フリードも彼女の決意に応えるように大きく成長し、強く輝きだす。ここから彼らの逆転劇が始まる。

その輝きを見ていたカズマは誰にも聞こえない声で言う。

「なんだよ、やりやあでできるじゃねえか。」

そしてガジェットの残骸まみれになった通路を進んだ。

その頃特にこれといった障害も無くスバルとティアナは本来の目標であるレリックと呼ばれるロストロギアを無事に回収していた。

「思ったよりガジェットの数が少なかったね。」

「あんたに似たどっかのバカが一人で突っ込んでいったからじゃない。」

「はは、武器が同じタイプだからね。しかも付けてる手も同じだし、戦い方だけでも教わってみようかな。教えてくれたらただけ。」

「たしかにアレは人にそういうの“ドゴン”……！」

突然何か無理やり突き破ったような音が響いた。
そして即座に二人は念話で話し出す。

「（今の音聞こえた？）」

「（残念ながらね、たぶん大型のガジェットが壁か扉を壊した音だ
と思う。）」

そうしているうちにも、そのガジェットが近づいているのか音はど
んどん大きくなっていく。

そしてとうとうスバル達が居る車両の扉が吹き飛ばされた。

「今よっ」

ティアナの合図と同時にスバルは敵に突撃し、ティアナはいつでも
パートナーに援護射撃出来る位置で己のデバイスを構える。

そしてスバルの拳がガジェットを捉えると、ガジェットは機械らし
からぬ声をあげる。

「のわっ。」

「え……………」

大型ガジェットの正体それはカズマだった。

そしてカズマはそのままスバルの拳で軽く吹っ飛ばす。

「だ、大丈夫ですか！！」

「てめえ…俺に恨みでもあんのか、二回目だぞ。ああ〜。」

「えええつと、助けてティアナ。」

スバルはいつになく真剣な眼差しでパートナーに助けを求める。ティアナはため息をつきながらカズマに話しかける。

「で、何で扉を突き破って出てきたのよ？」

「そんなの決まってるんだろ。開け方かんねえし壊した方が早えじやねえか。」

「……………」

二人はその答えに絶句する。ちなみに扉はつつかえを外せば開くレベルである。

そしてティアナはぐしゃぐしゃに曲がった扉を指差しながらスバルに言う。

「あんたもこうなりたくなかったらさっきの話止めときなさい。」

「ははははは……………うん、わかった。」

「はあ、意味分かんねえ」

そんなこんなで無事に任務は終わった。

帰りのへりの中は扉が無く寒かったとか。

第八話・ファーストミッション（後書き）

その時の思いつきで書いてるので伏線が全く無い。

ドクターのターンすらない。出すかすら決めてない

書き貯めとすると更新がひどい事になりかねないしな。……ケー

タイムキーボードで打てたらいいのに

第九話・犯罪者カズマ？（前書き）

最低でも月一での更新を保証します。……自信無いけど。

今回の話は作者のやりたかったことを詰め込んでみたオリジナルの話。

関係ないけどニコニコ動画のスクライドxpray)stsの挿入歌)のMADのシンクロ率は異常。

第九話・犯罪者カズマ？

一言だけ言わせてもらおうと現在カズマは暇である。

20分前はあまりに暇なので新しく始まるスバル達フォアードの訓練について行ったのだが、

スバルの“拳での戦いのコツとかあるんですか？”という質問に、

“近づいて殴れ”

と答えたらそれを聞いたなのはたちに何もするなと言われてまた暇になった。

その後シグナムがなにかと親しげな目線で見ていたがカズマは気付かず、やることのない訓練所を出て行った。

とりあえず部屋に戻ったところでカズマはまだ街に行った事がないことに気付いた。

そもそもカズマの生活は食う、寝る、ケンカの三拍子だけで表せるので任務以外では機動六課の敷地から出る必要はない。

カズマはこの事実が気に入らず、まるで檻の中で飼われている感覚すらおぼえた。

ここで彼の今日の行動は街をぶらつくことに決まった。

そして彼はまず紙を取り出しそこに文字を書く。

そこにはこう書かれていた。

“旅に出マス”

これは今は亡き彼の相棒に出掛ける時に書けと（冗談で）言われず
つと実践してきた事であり、毎回これを見るはめになる少女は呆れ
てもものも言えなくなるといふ優れものである。

カズマはそれを机の上に置くと、ズボンのポケットに適当に金（任
務協力への報酬）などをねじ込み勝手に一人で街にくり出した。

（現在）

街に着いたが暇なのは変わらなかった。

カズマは元々街に住む人間があまり好きではない、なぜなら彼らは
似たような服を着て、同じ方向を向き、同じ方向に歩き、同じよう
な顔で笑う、カズマにはそれが我慢できない。

中には謝る価値のないクズに謝り、媚び、出来る出来ない以前にも
はや行動すらしらない、そんな奴すらごまんといる。

ゆえに自然と少しずつ人通りの少ない所に進んでいく。

こんな街でも少し道を外れたら世間にクズというレッテルを貼られ
た奴らがいることをカズマはよく知っている。

「や、止めるよ何すんだよ」

子供の声が聞こえてくる。

“ほらな、こういうクズってのは何処にでもいる。”

カズマが声のした方へ行くと、いかにもヤクザなような格好をした三人組が騒いでいた。

からまれているのは十歳くらいの兄妹だった。

「離せよ、オレたちが何したって言うんだ。」

「てめえらがぶつかったせいで仲間がケガしちまってよ。慰謝料払ってくれや、」

「嘘つけ、そいつピンピンしてるじゃねえか。」

確かに三人共特にケガをした様子は無くそれが嘘だと誰でも分かる。

「てめえらじゃ話になんねえんだよ、親呼んでこい、親。」

「親は………いない。」

「は、親がないだあ。好都合だ、おい、こいつらさうしてどっかの星に売りつけるぞ。ガキだから高く売れるぜ。」

「な、そんなの事して」

「いいんだよ、だいたいてめえらが居なくなつて誰が心配するんだ、死んだ親か？それともてめえらを捨てた親か？」

「く、」

兄が悔しさで顔を歪める。

少し離れたところにいるカズマでさえ聞こえるのであるから、たまたまに通る通行人にも会話は聞こえているはずだが誰も聞こえてないふりをして素通りするだけである。

そういうカズマもこういうものは、からまれる奴らも悪いし自分の力で何とかしなくてはこの先おそらく生きてはいけないだろう、
と思い、三人が兄妹に手を出すまで動かないつもりでいた。

「こいつは関係ないんだ、オレはいいから見逃してくれ、頼む。」

そう言うと兄は下げたくない頭を下げる。

「バカじゃねえのか。二人共連れてくに“ガボツ”」

“むかつく”その感情が頭をよぎった瞬間。カズマは気が付くと男を殴り飛ばしていた。

男達は急に現れたカズマにブチキレる。

「何しやがるてめえ、どこのだいつだ。」

「てめえらと同じただのクズだよチンピラ君、」

「てめえふざげんな!!」

まず男の一人が殴りかかってくるがカズマはそれを腰を低く回転しながらかわしその腕を右手で掴む。

ただそれだけ、だが腕を掴まれた男はどうかわされのか、何をされたのかすら分からなかった。

それほど一瞬の出来事であり、男は悟らざるおえなかった。この目の前の男は自分より格上であることを。

だが男は幸運にも、いやこの場合不幸にも違法な魔導師を用心棒として雇っていた。

「おいおい、どおうした止まって見えるぜウスノ口。」

本来カズマの様な奴の挑発に男達は乗らないのだが皮肉にも仲間という存在がその判断を狂わせる。

「応援を、魔導師どもを呼べ。」

「な、ガキ一人にか」

「いいから呼べ。早く。」

「わ、わかったよ。」

そして男はカズマに向かって言う。

「悪いな、あんたヤバそうだからな魔導師を呼ばせてもらっせ。」

「ハッ嬉しいね、俺の楽しみを増やしてくれて。」

男はカズマの反応に驚く。

魔導師というものは質量兵器の有無にもよるが普通の方法では魔力の無い者では勝てないからだ。
カズマが魔導師という線もあるがこんな性格なら少しくらい自分の耳に入ってきているはずである。

男がそんなことを考えているとカズマが拳を握っているのが見えた。

「おつりやああお」

カズマの拳が男の顎を完全にとらえ、
男は声も出さずに意識を失った。

「こいつ、やりやがったな。」

「魔導師がくる前に俺達がぶっ潰してやる。」

他の男達もカズマに向かっていく。しかし

“ドカッ” “バキッ”

“ドゴッ”

カズマの拳の前に男達は次々と倒れていく。

「けっ、張り合いがいのねえ奴らだな。」

そしてカズマは兄妹の元へ歩み寄る。

「おい、ケガとかしてねえか？」

兄の方がカズマに応える。

「あつ、うん。助けられてありがとう。」

「そいつお前の妹か？」

「うん。こいつ喋れないからよくトラブルに巻き込まれるんだ、だからオレがしっかりしないと。」

「そうか、なあそいつが好きか？大切か？」

「当たり前だろ、家族なんだから。」

その言葉に満足したのかカズマは笑いながら

「よし、こいつをやるよ、俺バカだからよ使い方わかんねんだ。」

そう言ってポケットから金を出して兄の方に差し出す。

その額は子供でも安くないと分かるほどだった。

「いいの、お兄さん。」

「ああ、それともなにか、これってばそんなに良い物なのか？」

カズマがわざとらしくそう言って兄妹の頭をなでようとした時、

“ドカッ”

鋼の拳がカズマを殴り飛ばした。

そしてその拳を操る青い長髪の女性がカズマの左腕を掴み、

「管理局です。あなたを暴行の現行犯で逮捕します。」

自身の右腕と手錠で繋いだ。

そしてそのままカズマを引きずりながら兄妹に近づく。

「時空管理局です。お姉さんが来たからもう大丈夫よ。」

「あの、お姉さん」

「お姉さんはギンガっていうの、あなたたちの名前は？」

「いや、そうじゃなくてその人を離してあげてください。その人はオレ達を助けてくれたんです。」

「えっ、でもお金を」

「これはあの人 gave くれたんです。ほらオレ達を襲ったのはあそこに倒れている人です。」

そう言っつて兄はある方向を指差す。

ギンガがその方向を向くと確かに男達が倒れていた。その時の気持ちを一言で表すと、“やってしまった”だった。

事故とはいえ一般人を殴り飛ばしたとどんな処罰を受けるかわからない。最悪クビになるかもしれない。

“ああ今まで育ててくれたお父さん、そして天国にいるお母さん、

「すいません、私の管理局生活は今終わるかもしれません。」
などと考えているとカズマが立ち上がる。

「てめえ、いきなり何しやが…おいガキ共そろそろ逃げろ。きな臭くなつてきやがった。」

その言葉を聞いて兄妹は先ほどの男が魔導師がどうこう言っていたのを思い出し走り出す。

「本当にありがとう、お兄さん。」

「おう、元気だな。」

そんなやりとりを見て呆然としているギンガにカズマが怒鳴る。

「おいあんた、こいつを早く外せ。」

その言葉に気が付いたのかギンガは手錠を外すカードキーを取り出すが、

“パン”

銃声のような音が鳴り響き、
見るとカードキーは撃ち抜かれていた、

「ちっ、もう来やがったか。」

応援に呼ばれた魔導師達によって。

「悪いな兄ちゃん、そこに倒れてるのは俺らの雇い主のようだからな。しかし管理局員までいるとは、ますます無事に帰すわけにはいかなくなった。」

「そつちこそ悪いな、俺を楽しませるために来てくれたんだろ。おつさん。」

もちろん状況がギンガには全くが分からないが慌てながらもデバイスを展開する。
彼女のデバイスは自由な左手を包み込みカズマを殴り飛ばした鋼の拳に変える。

「（そんな、一般人と繋がれた状態で違法魔導師と戦えるわけない、どうすれば……）」

「おいあんた、その左腕だけで自分の身くらいなんとかかなりそうか？」

「はい、なんとか、しかしそれではあなたが、」

「問題ねえよ、右腕さえ自由ならあんな奴らなんざあ楽勝だ。

それにたぶんあんたのそいつと相性は良いと思っぜ。俺のこいつは」

そう言うと周囲のコンクリートが削れ、カズマの右腕がアルターに変化する。

その様子にギンガだけでなく違法魔導師までも驚く。

「ちつ、てめえも魔導師だったのか。するとその手錠を見るにさしずめお仲間ってところか」

「魔導師なんて上等なもんと一緒にすんじゃねーよ。

俺はただのネイティブアルター、シエルブリットのカズマだ。」

「（デバイスに似てるけど少し違う。右腕“自体”をデバイスに変えている。それにカズマって名前…確かどこかで……）」

ギンガが思考しているとカズマが小声で話しかけてきた。

「おい、ねえちゃん名前は？」

「ギンガ。ギンガ・ナカジマです。そっちはカズマさんでいいですよね。」

「OK、ギンガだな。あとカズマでいい敬語もいらねえ。」

作戦だが俺はコイツで右側の奴らをボコる、あんたはソイツで左の奴らをボコる、簡単だろ。

じゃあそっとう事で」

それだけ言つてカズマはアルター化した右腕で地面を殴り、勢い良く魔導師達の方向に飛び出す。

もちろん手錠で繋がれたギンガも一緒に。

「イヤアアアアア」

そしてそのまま一人の魔導師に激突し、吹き飛ばす。

「よし、まずは一人だな」

カズマが少し笑いながらそう言っているとギンガもなんとか立ち上がる。

「こ、こんな事するなら先に言ってください。」

そんな二人を魔導師達が黙って見ているわけもなくあっという間に

周りを囲まれてしまった。

そして一斉にデバイスを向けられる。

カズマとギンガは背中合わせになりそれぞれの拳を構える。

「馬鹿な奴らだ。わざわざ囲まれに来てくれるなんてよ。」

魔導師の一人が自分達の勝利を確信してカズマ達を罵倒する。

するとカズマの頭の中にギンガの声が流れる

「（私が相手の魔弾を防ぎますから1・2・3で前に走ってください。…いきます、1…2…3）」

そして同時にカズマとギンガは全力で前に走り出す。

「うっ、撃てえええ」

魔導師達が一斉に魔弾を放つがそれをさっきまでずっと魔力を込め、より強固になったギンガのバリアがそれを防ぐ。

魔導師との距離が零になったとき、カズマの右腕が、ギンガの左腕が、一人ずつ魔導師を殴り飛ばす。

「がふっ」「ぎはっ」

「これで三人目！！」

「うおおおお」

完璧だと思っていた陣形がいと簡単に崩され魔導師達は焦り愚かにも数にものをいわせ乱闘にもちこもつと突撃してきた。いくら手錠で繋がれているとはいえ鋼の拳を持つ二人だ。

「じゃあ作戦通りに」

「私が左で」

「俺が右だ、頼りにしてるぜギンガ」

そして二人は愚かにも自分達に接近戦を挑む者たちを迎え撃つ。

まるでその乱闘は、いやギンガとカズマの戦いぶりは例えるなら竜巻、

その拳が届く範囲に近づく者を片っ端から吹き飛ばす様は竜巻としか言えなかった。

魔導師達も二人の拳を防ごうとバリアを張るが、

「そんなもんで、コイツが止められると思うなあああ。」

カズマの拳がバリアをデバイスごと砕き、魔導師に炸裂する。

一方ギンガは力わざではなく相手の攻撃を確実にいなし大きなスキが出来たところを突くというカズマと真逆の戦い方をしている。

それでも二人に共通することはやはり片腕では限界があるということである。しかもお互いに手錠で繋がれているので大きく動ききれない。

それでも戦えるのはそれ以上に二人の息が合っているからである。

カズマががむしゃらに突っ込み魔弾が当たりそうになるとギンガが防ぎ、ギンガが壊しきれない壁があるとカズマが壊す。

一人は男の左腕に、もう一人は女の右腕となる。

そんな戦い方で魔導師達を圧倒していると一人の魔導師のデバイスがこちらを向き光を放っているのにギンガが気付いた。

「（砲撃！！）カズマ、」

ギンガに呼ばれカズマも振り向く。だがもう砲撃は放たれる寸前だった。

「ちっ、掴まれ！！」

「きゃっ」

カズマは左腕だけでギンガを抱きかかえる。そしてそのまま右腕で地面を殴りその反動でギンガごと空高く舞い上がる。

だが砲撃が放たれる事は無かった。

「馬鹿が引つかかりやがった、狙ってくれっていつてるようなもんだぜ。」

その言葉通り一斉に魔導師達が自身のデバイスを空中のカズマ達に向ける。

“畏だった”その事にギンガは焦りだす。自身のスキルで回避しようと考えたがおそらく初速が足りず間に合わないだろう。

だがそこで自分を抱きかかえているカズマの左腕が全く震えておらず、むしろ痛いくらいに力が込められていることに気付いた。

ギンガがカズマの顔を見ると彼は嬉しそうに、いや楽しそうに笑っていた。

まるで欲しい物が見つかった子供のよう。

そしてカズマはギンガの方を向き言う。

「こっからが本番だ。しっかり掴まってな。」

その言葉を聞いたギンガは思う。“この人ならこんな状況も笑いながら拳一つで変えられる”けして根拠があるわけではないが何故かそう思った。

そしてカズマは拳を構える。

「いくぜ、衝撃のおお」

カズマの肩に付いた羽が砕け始める。その時ギンガはしっかりとカズマに掴まり、魔導師達はまだ抵抗するカズマに焦りだし魔弾を放とうとする。

「撃て、撃ちまくれえええ」

だが“早さが足りない!!”

「ファーストブリットオオオ」

カズマの肩から出る緑色の閃光がその爆発的な推進力でカズマの拳を魔導師達にぶつける。

ハズだったのだが……。

「げっ」

ギンガを抱きかかえていることにより何時ものようにいかず、魔導師達を大きく逸れて何も無い地面に激突してしまった。

ドゴオオオオン

地面に亀裂がはしり、膨大な土煙が舞う。

そしてそこには見事なクレータとそれをつくったカズマ、そしてギンガがいた。

「バツ、バケモノだああ！」

魔導師達はそのあまりの威力に恐怖し、さっきまでの威勢は何だったのか一目散に逃げていった。

「何だよ、これからだってのによ。」

カズマは落胆しつつも何とかなつたので良しとした。
ついでに手錠も衝撃で引きちぎれていた。

そこでギンガが座ったまま立ち上がらないのに気付く。

「どっつしたよ、立たねえのか？」

「……てないのよ。」

ギンガは顔を赤くしながらつぶやく。

「なんだって？」

「く、腰が抜けて立てないのよ。」

その言葉を聞いたカズマは

「ハハハお前その年で腰って、」

爆笑した。だがそのせいでギンガに恐ろしい形相で睨まれた。さすがに悪いと思ったカズマは

「悪かったよ、ほら機嫌直せって。」

そう言って背中を向けしゃがむ。

「立てねーんだろ、ほら負ぶさねよ。」

「そんなこと、」

「置いてくぞ。」

そう言われギンガはしぶしぶカズマの背中に負ぶさる。

「（大きな背中だなあ。男の人に背負ってもらったのってお父さん以外で初めてかも。）」

少し顔を赤くしながらそんなことを考えているとカズマに話し掛けられる。

「なあ、ギンガ。」

「な、なに」

「これから行く、き、き」

「機動六課？」

「そうそれぞれ、よく分かったな。その場所分かるか？」

「ハア」。自分が保護されてる場所くらい覚えてなさいよ」

「悪いかよ、にしても何で分かったんだ。」

「まだ気付いてないの？似てると思うんだけど。私の妹が……」

ハイブリッドならぬシェルブリットカーカズマはギンガを乗せて機動六課へと足を進める。

（機動六課）

「あ〜、やっと着いたぜ。」

カズマがギンガを背負いながら機動六課隊舎の前でつぶやく。

ちなみにギンガは道中“何だあのバカップルは”という視線を向けられ（カズマは気付いてない）顔を赤くしながら黙っている。

五分前、

機動六課の隊舎の入口に隊長陣とフォワード陣がはやてに集められ

ていた。

「では今から“街に放たれた野獣？カズマを捕獲しつつ全員で遊び倒すよ大作戦”を開始するでええ。」

はやてが欲望丸出しの作戦名を高らかに宣言するがそこにフェイトが口を挟む。

「でもはやて、私たち仕事が残ってるんだけど。」

その言葉に集められた全員が頷く。

「そんな固いから彼氏の一人も出来ひんのやフェイトちゃんは。それにこれは任務、部隊長が任務ゆうたら任務なんや。」

「彼氏は関係ないよ、それにはやてだって陰で一緒にいると面倒くさいとか言われてるくせに。」

「なんやって！！何故や、キャラが濃すぎるんか、いやいやそんなことは…」

「フェイトちゃん、反応するところが違うよ。」

なのはは親友のあまりの必死さに思わず突っ込む。

その時、入口の扉が開き誰かが入ってきた。

「何してんだお前ら？」

「カズ君！」 「カズマ！！！！」

全員がカズマの元へ歩み寄る。そして近づけばギンガの存在もバレル訳で、

「ギン姉、どうしておんぶされてるの？」

「ス、スバル」

ある意味スバルはギンガにとって姉としてこのタイミングで一番会いたくない人物であった。

カズマはそれを察したのか簡単に説明しだす。

「手錠で繋がれたまま衝撃のファーストブリットを相手にぶち込んだんだが、そんな時に腰が抜けたんだとよ。」

だがもちろんそれだけでは通じず、全員が詳しく聞こうとすると、はやてが急に話し出す。

「ファーストにブリットぶち込んでしかも衝撃やおお、損でもって手錠プレイ……」

“ベゴシヤ”

はやての顔面にフルスイングされたレイジングハートがめり込み、そのままはやては音も無く倒れる。

そして血が付いたレイジングハートを持ったなのはがゴミを見るような顔で吐き捨てる。

「毒虫が………なの。」

ちなみに意味が分かってしまった女性陣（スバル、キャロ、ヴィータ以外）は顔を背けた。

もちろんギンガは煙が出るかと思うほど顔を赤くし否定していたが、カズマの

「あいつは結局何が言いたかったんだ？」

という質問で限界を迎えたのか気絶した。

その次の日、ギンガの「カズマ……か。」というつぶやきで彼女の父親が率いる部隊は大騒ぎになったとかなくなってないとか

第九話・犯罪者カズマ？（後書き）

部隊長の問題発言はドラマCDの君島から。

なのはは少しヒロインさせつつ劉鳳ポジションを目指します。

ギンガは特にサブヒロイン予定。メインヒロインが現段階でいな
いけど。

こんな無計画ですけどどうぞよろしくお願いします。

でもギンガ良いよね。

第九・五話 ヘリコプターぶらり旅（前書き）

短か……！……この一言に尽きるぜ

そういえば劉鳳が一人でクロスオーバーしてるの見たこと無いな。
兄貴やカズマは有るけど……性格だな。

第九・五話 ヘリコプターぶらり旅

さて、今ヘリにはある任務の場所に向かうため、機動六課の主戦力といわれている隊長陣とフォワード陣＋カズマが乗っている。

ここまで異常な戦力を引き出してくるのかというと、今回の任務は今までとは大きく異なるタイプのものだからだ。

あるホテルを警備、及びそのホテルを狙ってくるであろうガジエツトの撃退が今回の任務である。

今まで通り敵を殲滅せんめつすればいいのは変わらないが、こちらから攻めるのでは無く相手側を迎え撃つ形式になり、当然だが難易度が跳ね上がりそれ相応の人数が必要になる。

そこで目をつけられたのが日頃から異常なほど戦力を所有していると言われ続け何かと敵の多い機動六課である。

つまりそれだけの戦力があるなら結果を出してみろという嫌味半分の任務だ、だが任務は任務やるからには徹底的にやらなければいけない。

「今回行く事になるホテルアグスタは特別に許可の下りたロストギアを売るオークション会場になってるの、それでそこに有るロストギアをレリックと誤認したガジエツトから会場及びロストギアを守るのが今回の任務です。」

なのはが大まかに説明を終えると空中のモニターが現れて一人の男

性を映し出す。

すると今度はフワフワと浮いていたリインフォースがその人物について説明しだす。

「この人が一連の事件や今回の任務の黒幕と想われる人物です。名前はジェイル・スカリエッティ、ほとんどの管理世界で指名手配されているとんでもない人なのです。」

「悪党つてのはやっぱり蛇面なんだな。」

それがカズマがスカリエッティを見て最初に思った感想であった。

「何か言ったですかカズマさん？」

「何でもないですよ曹長さん、なのでわたしに構わずお続け下さい。はい、」

「そ、そうですね、それなら続けるです。この人の……………」

暇だな〜という感じでカズマは窓を眺めているとはやてに小突かれる。

「あんまりラインいじめたらうちが許さへんからな。どうせふてくされてるのも“思いつきり暴れられないから警備は嫌いだ”とかそんな感じやろ？」

「なんだよ、分かってんじゃねえか八神。」

「うちかてだてに部隊長やってへん。それにあんたは部隊の中でもダントツで分かりやすいというか単純やからな、とりあえずあんたは何時も通り“血の気バリバリのカズマくん”でおったら良いねん。それだけで周りは安心するからな。」

「そうかい、お前もそんなマジモードじゃなくて何時もの“アホ丸出しの八神さん”の方が良いぜ、調子狂う。」

「アホって……。誰のためにマジモードになったと思っとなねん。」

「……まあええわ、それで…少しはやる気でたんか？」

「何の事だよ、俺は“血の気バリバリのカズマくん”だからな、最初からやる気満々だ。」

「そうかいな、ならうちもあんたの言う“明るくて面白いはやてさん”に戻らしてもらおうわ。いや、マジモードってしんどいな、顔の筋肉つるかと思っただわ。」

「誰が言ったよ誰が。………手間かけて悪かったな。」

「きしょくわるゝ。」

「てめええ。」

「いやゝ助けてなのはちゃん、カズマに襲われるうゝ。」

そう言いながらはやてはなのはの後ろに隠れる。

「え、はやてちゃんどういう状況。」

「ほら、早く何とかせんとなのはちゃんも襲われるであの野獣に」

「えええええ！……！」

そう言われなのはは野獣ことカズマを見る。

カズマはなのは（の後ろにいるはやて）を見ながら近づいてくる。

「カズくんが私に襲ってきて襲われてカズくんが……きゆう、
ボタン」

なのは顔を真っ赤にして思考回路がオーバーシュートしたのか倒れた。

「うわ、最強のなのはちゃんシールドが…このけだもの」

「わけわかんねえこと言ってるじゃねえ、どうすんだよこいつ」

結局二人で介抱させられて暇どころではなかった。

ちなみに

シグナムとヴィータの会話

「なあヴィータ、なぜ高町が気絶したかわかるか。カズマが襲い掛かる、つまり殴りかかるくらいのプレッシャーで気絶したとは思えないのだが、」

「なんだ、そんな事もわかんねえのか。あれは霸 だ。カズマは睨んだだけだからな」

「 気だと、私は聞いたことも無いが、」

「無限書庫（の漫画コーナー）にあったから間違いねえぞ」

「そうか、無限書庫（の機密情報）に……。私も習ってみるか」

「このことでシグナムが大恥をかく日はそう遠くない。」

第九・五話 ヘリコプターぶらり旅（後書き）

なんか区切りが良かったんで上げてみた。

続きは現在進行形で書いてます。

ほんとだよ。

第十話・交差しだす拳（前書き）

あけましておめでとついでいます。

いや〜こんなペースで今年中に終わるんでしょうか、それ以前に完結できるんでしょうか？

第十話・交差しだす拳

カズマたちは無事に目的地であるホテルアグスタに着き、それぞれの持ち場について説明をはやてから受けていた。

「第一防衛ライン、まあ早い話一番最初に敵を迎え撃つのはシグナム達守護騎士、第二防衛ラインはフォワード陣、そんでもって会場内の最終防衛ラインを守るのがこちら隊長陣や、みんなそれで良いか？」

「……はい。」

機動六課一同は敬礼をしながらそれぞれの持ち場を確認する。

一人の男を除いて

「おい八神、俺はどうすりやいいんだよ」

その一人の男ことカズマがはやてに問いかける。

「カズマは……まあフォワード陣の中にも入っというて「嫌だね、シグナム達の所の方がハデに喧嘩が出来んだろ。そっちがいい、いやそっちに決めた。」

その自分勝手というかひたすら自由な態度に一同は呆れて何も言えなかった。

ただ誰が言ったかはわからないが“なら最初から聞くなよ”というつぶやきに全員が頷いたのは確かだ。

「ん〜、まあええけど。その代わりっていったらなんやけど後でホテルの会場に来てくれへんか。」

あれを“まあええけど”で済ませるはやてはやはり大物だろう。

「ああ、何で俺が」

「まあまあ、来て損はさせへんって、……………ええもんも見れるで。」

「……………わかったよ。行けばいいんだろ行けば、」

その時のはやてのにやけ顔があまりにおぞましいものだったのでカズマはしぶしぶ頷く。

「ほんならひとまず解散や、全員持ち場について待機及び連絡を待つように。」

「「「了解」「」」

その合図で今度こそ全員持ち場に向かって行った。

S i d e ? ? ?

ホテルアグスタから数キロ離れた森の中にロープをまとう二人の男女がいた。

男の方はかなり大柄で厳ついそこそこの年を取った大男、女の方はまだ年端もいかぬ少女でその顔は人形のように無表情である。

そして一匹の虫の様なものが飛んできて少女の手にとまった。

s i d e ホテル会場

本来こういう場では正装でいないといけないのだがカズマはスーツなどにはろくな思い出が無いなどという、他人からしたら訳も分からない理由で何時も通りの格好で会場内にいるので浮きまくっている。

だが悪い事ばかりではなく彼を呼びつけた人物もすぐに彼を見つけ

る事が出来た。

「おいカズマ、こっちやこっち。」

カズマが振り向くとそこにはカズマとは違う意味で目立っているはやて、フェイト、そしてなのはがドレスを着て立っていた。

「おう、八神に高町とあと………金髪のねえちゃん」

「やっぱり私だけ名前覚えられてない。」

カズマの発言によりフェイトは早くもいじけて体育座りを始めてしまう。

「それよりカズマ、うちの格好見て何の感想も無いんか。」

ふとカズマは（フェイトは体育座り、はやては何かムカつくのになのはの方を見る。）

「ど、どうかなカズくん。」

なのはが少し顔を赤くしながら聞いてきた。

カズマは5秒くらい見た後

「そういう格好してるとこっちはかなりそそられるねえ」

「そ、そそれー!」

なのはとしてもまさかそんなセクハラまがい? な事を言われるとは思っても無く再び倒れるんじゃないかと思うくらい顔を赤くする。しまいにはフェイトと

「私口説かれてるのかな?」

「知らないよ。」

という会話までした。

だがカズマはすぐにはやての方を向き

「で、こんなもん見せるために呼びつけたんじゃないやねえだろ。」

「こ、こんなもん」

その言葉を聞いたなのは何か馬鹿らしくなりフェイト同様体育座りを始めた。

「いいいいいよ、どうせこんなもんですよ」

その時フェイトはどこかたそがれてしまった親友の背中をたたき続けてあげた。

「カズマ、上げといて落とすなんてうちでもようせえへんで。」

カズマの無神経さにさすがのはやても呆れる。

そしてリストバンドみたいな物をカズマに差し出す。

「何だよこれ、腕輪か？」

「通信機や、魔力が無くても念話みたいなことができる優れもの。

ただしあくまでも電気で動いてるから自分から念話を始める事はできへん。相手が念話してきて初めて返事が返せるんや。」

「よくわかんねえけど、お前らがかなみのアルター使ってるようなもんか。」

「さすがに心までは読まれへんけどな。とりあえずうちの用はこんなもんや、ほらなのはちゃん何か言つことがあつたんとちがつの？」

その言葉に反応したのかなのははそのそと立ち上がり真剣な顔をつくる。

「実はフォワードのみんな、特にティアナやエリオを支えてあげて欲しいの、機動六課は女の子ばかりだからエリオはお兄さんつてのに少し憧れてる所があるから。ティアナは真面目だから悩みやすい子で、でも私たちは上司と部下だからどこか言いにくい事もある

だろうし……でもカズくんならそういう関係も無いから支えられると思うの、駄目かな？」

「いいのかよ、俺みたいなやつにそんな事頼んで。」

「大丈夫だよ、カズくん不器用なだけで優しいから。」

その瞬間カズマは目の前ののが一瞬かなみに見えた。………
方的に別れた時、自分を優しいと言った少女に。

「バカだよな、あいつもお前も。いいぜやってやる、でもタダじゃだめだ。そうだな………おいしいサンドイッチでも作ってくれ。」

「え、そんな事でいいの？」

「おう、俺とあいつの会社は激安がモットーらしいからな。出血大サービスってやつだ。」

「え?????」

それだけ言つてカズマは会場をあとにして出て行った。

その後ろ姿を見てなのははふと思う、自分はカズマの過去の事を何も知らない。

何をしてどのように生きてきたのか。
カズマが時々懐かしさと悲しみが混ざり合った顔で口にするあいつ
と呼ばれる人のこと、

いつか本当に理解しあえた時にそれらを聞いてみたいと思った。

side???

大男と少女の前には少し大きな画面が浮いておりそこに映る人物、
ジェイル・スカリエッティと話し合っていた。

「というわけで協力して欲しいのだよルーテシア、ダメかい？」

「わかった。」

ルーテシアと呼ばれた少女はローブを脱ぎ大男に渡す。

「いいのか？」

「うん、行ってくるねゼスト」

「ああ、」

それだけ言ってルーテシアは森の奥へと消えていった。

「さて君にも特別な頼みごとがあるのだが騎士ゼスト。」

「内容によるな」

「ほう、めずらしい。内容だが今ホテルを警備している機動六課の中にある男がいる。その男の戦闘データが欲しい、いや正直に言うデータだけでなくその男自身も連れてきて欲しいがね」

「何故その男にこだわる？貴様は例のサンプルの研究で手一杯だろう」

「あの例のサンプルと同質の力を持っていると私は思っている。その男のデータがあればさらに君のデバイスなんかもさらに強化、いや力を正しい方向に使うだけだから改良か。とりあえずより強くできるだろうし損はさせないよ。」

「……………いいだろう。」

ゼストはどこか渋々といった感じで頷く。

「それは助かる、さっそく作戦だが……………」

sideカズマ

カズマとヴィータ、シグナムは数分前に突然大量に現れたガジェットとの戦闘の最前線にいた。

ドカッ グシャ バキ ザン

次から次に現れるガジェットをカズマの拳が砕き、シグナムの剣が切り裂き、ヴィータの鎚が潰す
金属音ばかりが辺りにいつまでも響き渡り続けていた。

「クソっ、こいつら雑魚のくせに数が多すぎだろ、このやるおおお
お！！！！！」

カズマは2枚目の羽を消費して薄い虹色の光の波動をドーム状に放ち、周りのガジェットを吹き飛ばしなかには分解までされたガジェットもいた。

その様子を空中から見ていたヴィータとシグナムは

「むちゃくちゃだなあいつ。何でもありじゃねえか。」

「ああ、だが3回しか使えんというのはかなりいたいな。」

誤解をまねきそうだが彼女たちはこうして会話をしている間にも空

中を進むガジェットをその鎚と剣で次々と落としていつている。
その姿にはどこか余裕すら垣間見え、彼女たちが歴戦の勇士である
ことがわかる。

しばらくすると “ヴォーン” という音と共にフォワード陣の第二防
衛ラインとカズマ達のいる場所の中間地点に巨大な魔法陣が現れる。

「しまつ、相手側にも召喚士が居るようだ。フォワードたちの場所
まで戻るぞ。」

シグナムが叫ぶとほぼ同時に魔法陣から大量のガジェットが飛び出
しフォワード陣の戦闘が始まった。

カズマたちも戻ろうとしたのだが

突然 パン という銃声になりその方向を向くと森の一部が照明
弾のようなもので照らされる。
それは相手が自らの場所を教えているようなものだ

だがシグナムは深追いは危険と思い、

「明らかに罠だ、無視して戻るぞ」

「おいシグナム、俺が行く。」

元々カズマは敵の場所がわかっているのに見逃すようなことができ

るタイプではない。

「だめだ！！単独行動は危険すぎる。」

「やられっぱなしは趣味じゃねえ、あんただってそうだろ。」

シグナムはカズマの目を見る。少なくとも死に急ぐ者の目ではないことはわかる。

「おいシグナム、早く来い、」

ヴィータの呼ぶ声が聞こえ、こうしている間にもフォワード陣がガジェットとの戦闘をしている事を再確認したシグナムはすぐさま決断する。

そしてカズマの胸ぐらを掴み

「必ずここに帰ってこい、でなければ私はお前を一生許さんからな。」

「ああわかってる、……じゃあ行ってくるよ」

シグナムは手を離してカズマを倒すべき相手の方へ送りだす。

そのままカズマとシグナムはお互い反対の方向へと走り出した。

「確かここらへんだな!!」

バキバキツバキ

カズマがその右腕で木をなぎ倒ながら進んでしばらく行くと少し開けた場所に出た。

そしてそこにはかなり大きな突撃槍の形をしたデバイスを持つゼストといわれていた男が立っていた。

カズマは右腕を男に向けて構えながら聞く。

「あんたがこの喧嘩の親玉かいおっさん。」

「そう思ってくれてかまわん。」

カズマは男の平然とした態度がかんに障る

「そうかい、悪いがこっちは急いでるんでさっさとすませるぜ。抹殺の」

大きく右腕を奮い右腕に力を込める。

ゼストは逆に盾のように突撃槍を構える。

「ラストブリットオオオオオオ」

カズマの肩の最後の羽が砕け緑色の光の尾を描きながらゼストに向

かって真っ直ぐに突撃して行く。

そしてゼストの突撃槍に右腕が当たりブローバックする。が……

「（軽い！！）」

それもそのはず、ゼストはカズマの拳が槍に当たる瞬間に槍から手を離していた。

そしてそのまま向かってくるカズマの勢いも利用してわき腹に掌を叩き込む。

バキッ

「がふっ」

カズマは転がりながら吹き飛ばされ木にぶつかる。

しかしゼストはカズマに叩き込んだ腕を見ながら驚いたように言う。

「とっさに左腕で防ぐとは、どうやら能力に飼い慣らされているわけではないらしい。」

その言葉通りカズマはすぐさま立ち上がる。

「当たり前だ、つってもこいつが無きゃヤバかったかもな。」

カズマがぶらぶらと揺らす左腕には今にも崩れ落ちそうなほど損傷したリストバンド型の通信機が付いていた。

「だがあきらめろ。こちらの情報では貴様の技は一回の戦闘で三発までしか撃てずしかもさっきの技が最後の一発のはずだ。貴様に勝てる要素など無い、おとなしく我々に付いて来て貰おうか。」

「付いて来いだよ、悪いがそいつは聞けねえよ。」

カズマは右腕の拳にきしむほど力を込めて握り締める。

「約束しちまつたんだよ、全く色気もねえ性格した女と、必ず帰るってな。」

「だからよあそいつだけは聞けねええええ」

カズマが右腕をかざすと周りの岩が次々と分解されていく。

そして彼の右腕も分解されてよりシンプルにより強い新たな右腕を再構成していく。

肩の羽があつた場所には中心が噴射口になつた風車が、

閉じられていた右目はたてがみのような装飾が付き、左目とは違う金色の眼光を放つ。

これがカズマのシェルブリット第二形態である。

そしてカズマが新たな右腕を構え直す。

「さあ続きをやるつげおっさん、ここからが楽しみの2Nd
Roundだ。」
R^セ

第十話・交差しだす拳（後書き）

めずらしく長くなりそうなので中途半端な所で切りました。

ちなみにおいしいサンドイッチと会社はドラマCDネタです。

なのはは料理上手いんだろうか？

壊滅のブレイクファーストオオオオ

第十一話・接触（前書き）

さ行を打とうとして間違えて電源ボタンを押して文章が消滅する事件が発生した。

文章がもし適当に感じたら多分そのせいです。
本当にすいません。

あと更新遅れてごめんね

第十一話・接触

sideフォワード

フォワード陣たちは次々と魔法陣から現れるガジェットとの戦闘をしいられていた。

いくらガジェットとの戦闘を想定した訓練を受けているとはいえここまで大量のガジェットを相手にするのは今のフォワード陣には荷が重いものがあり、防戦一方になってしまっている。

だが防戦一方とは前向きに考えると攻撃に移るきっかけさえのがさなければいくらかでも現状をひっくり返せるということをフォワード陣は……少なくともスターズは知っていた。

「（隊長たちがこっちに向かってるけどたぶん間に合わない……。それなら、）スバル、次の合図で例の作戦で行くわよ。」

ティアナはしばしの考察の末に援護はギリギリ間に合わない判断し、自らの相棒に指示をだす。

スバルはその言葉を聞くと少しの迷いも無くティアナに頷いた。

ガジェットがいくら優秀な戦闘機で在ろうと無尽蔵に攻撃し続けることは出来ない。

どんなに効率が良くてもわずかにエネルギーを溜めるなどの予備動作による隙ができるのである。

そしてその時が、

キュイイー

「(きた!!)」

訪れた。

「今よスバル!!」

ティアナの声に反応し、スバルは自らが作り出したウイングロードの上を駆け抜けてガジェットの方に一人突撃する。

《何をしようとしてるんですか、ヴィータちゃんたちの到着を待って……》

ティアナの頭にシャマルの念話での警告が鳴り響く。が……

「大丈夫です、それに守ってばかりじゃ突破されます。」

そついいティアナはシャマルの警告を無視して、自らの二丁拳銃型のデバイスであるクロスミラージュにそれぞれ2つずつカートリッジを使い魔力を込めた。

そしてティアナの周りに大量の魔力弾が現れる、やはりわずかに無理があつたのか体がミシミシと嫌な音をたてる。

しかし彼女はそんなことはまるで気にしていないかのように振る舞う。

何故なら……

「（私は証明しなくちゃいけない。才能が、魔力が、全てが凡人レベルの私でも肩を並べて戦えることを、ランスターの弾丸は全てを撃ち抜けるってことを！！）」

ガジェットはおとり役であるスバルの対応に追われ、こちらには気づいていない、いや今更気づいてももう遅い。

ティアナはクロスミラージュの銃身をガジェットに向ける。

「クロスファイヤー……シュート」

その銃身から放たれた無数の弾丸が次々と敵ガジェットを撃ち抜いていく。

だが一発の弾丸がわずかにコースから外れ、その先にはスバルがいた。

スバルは弾丸が自身に向かって来ている事にまるで気が付いていない。

ティアナが寸前になってそのことに気づき弾丸の軌道を修正しようとするが放たれた弾丸が多すぎて間に合いそうもない。

「（当たる！！）」

そう思ったその時、

ドゴオオオオン！

「うわっ、っ、っ」

「ぎゃっ、っ、っ」

此処からそう遠くない場所で爆発が起き、立ってられないほどの風がフォワードたちを襲う。

「痛っ、何なのよ今のは、…そうだスバルは」

ティアナはなんとか立ち上がり自身の相棒のスバルを姿を探す。その結果

「痛たたた、」

どこか体をぶつけたのか痛そうな顔をしているがとりあえず無事なスバルを見つけホッと一息つく。

おそらく先ほどの風で体制を崩したことで弾丸が奇跡的に当たらなかったのだろう。

さらに

「大丈夫かお前ら、」

上を見上げるとヴィータたちも到着したようでティアナが破壊した分を差し引いてもかなりガジェットが減っている。

もうこの場所は安全だろう。

だがティアナはふと先ほどの爆発が無ければ相棒がどうなっていたかを考えてしまう。

そして状況からみておそらく先ほどの爆発を起こしたであろう男に感謝と嫉妬の入り混じった感情を向けた。

sideカズマ

カズマとゼストのいた森の開けた場所はもはや面影を全く残してないほど、無惨に荒れ果てクレータまみれになっていた。

「はあっはあっ、こいつで四発目え、」

カズマがシェルブリットを縦に構え拳を握りしめると肘から手の甲にかけての装甲が開き、金色の光を放つ。

さらに背中の風車も回りだしわずかにカズマの体を浮かせる。

「（来るか、）」

ゼストがそう思ったのと同時に、カズマが風車の中心から光を吹き出し爆発的な加速力で真っ直ぐ突撃してきた。

「どおっ！いあああ！……！」

ゼストはこれまでの戦い方から真っ直ぐ来ると予測していたので横に飛び退くだけでそれを避ける。

さらにすれ違い際に自らの武器である突撃槍型のデバイスをカズマに向かって振るう。

だが突撃槍が当たる瞬間にカズマがいきなり減速し、その凶悪なまでに強化された右腕でゼストの攻撃を防ぐ。

「っ！！！！」

これにはゼストも驚きの表情をうかべる。

自分の完全に決まったと思った攻撃が防がれた事にはない。

それは先ほどまでの戦闘からこちらが相手の攻撃のコースを読んだのと同じように、相手がこちらのカウンターを読んでいただけのことだ。

では何に驚いているのか、

それはほかでもないこの防御方法を何の躊躇ちゅうしゆも無く実行したことがある。

上手くいったから良いものを失敗すればどれほどの大怪我をするかは目に見えている。

それをこの男はゼストほどの達人にも何の違和感も感じさせずに行った。

ゼストは思う、この男には恐怖心が、迷いが無いのだと。

力が大きいだけではなくその力を何のおごりも迷いも無く使える者。

この時初めてゼストはカズマを強者と認めた。

「つか、まえたああ!!!」

カズマは瞬時にゼストの槍の刃先を掴み取りその恐ろしいほどの腕力でゼストを槍ごと自身の上空に放り投げる。

「ちっ、」

ゼストは地面に頭を、突撃槍をカズマに向ける体制で飛行魔法を駆使し空中で急停止する。

そして槍に自身のありったけの魔力を込める。

一方のカズマもゼストを投げ飛ばした直後にシエルブリットの装甲を開き拳に金色の光をまとわせる。

この時の二人の考えは全く同じであった。

「（垂直下での一撃必殺。）」

いくらカズマとゼストが常人離れた体力の持ち主でもいつかは限界がくる。

ならばこのチャンスを逃す手は無い。

そして二人は全く同時に飛び出した。

カズマは真上にいるゼストに向かって、

ゼストは真下にいるカズマに向かって、

それぞれの獲物を突き出した。

「（おり）は（あああああああああ！！！！！！）」

バジイイイイ

カズマの拳とゼストの槍がぶつかっている部分にはあまりのエネルギーにより常にスパークが起き今にも爆発を引き起こそうだった。

それほどぶつかり合いたがどちらかが一方的に押し負けるということはなく、今もなお押し合いが続くほど互角の威力である。

「ぐつつつ」

だがゼストの方が重力を味方につけているからか少しずつカズマが地面の方向に押し戻されていく。

「（くそ、こんな所で……負けてられつかよ）シエルブリット、バーストオオオオ」

カズマが叫んだ瞬間彼の手の甲と風車から出ていた光が今までとは比べものにならないくらい強くなる。

ビシィッ

それと同時にゼストの突撃槍の刃に亀裂がはしる。

「何つつ」

そしてその勢いは止まることは無く、刃が完全に砕け散る。

だがゼストは亀裂が入った時点ですぐさま下向きに行使していた飛行魔法を横向きに切り替える事で、カズマの垂直上のラインから抜け出し直撃だけは避けるがデバイスに限界が来たのか飛行魔法が消え、地面に激突した。

カズマはすぐさま地面に着地してゼストに話しかける。

「今度はあなたの番だぜおっさん。

あなたはどうかやってあがく?」

ゼストは少しフラフラしながらもしつかりと立ち上がる。

「まさかあの男に感謝する時がくるとはな。」

そう言ってゼストは刃がほとんど砕けほぼ柄だけになったデバイスをかざすと、ゼストのデバイスが虹色に発光する。

周囲に有ったいくつかの岩が粒子状に分解され刃が有った所に集まり、新たな刃を構成していく。

まるでそれは、

「アルター!、その槍あなたのアルターか」

ゼストが再構成した突撃槍を構え直す。

「いや、その技術を使っている事に間違いないが正確には違う。それはさておき、悪いがここからは私の 2Nd Roundだ。」

らしくない、先ほどのセリフは本当に自分らしくないとゼストは思う。だが目の前のこの男は自分の中にある死んだと思われていた感情を呼び起こした。

その感情はプライド、またの名を意地。

「フハハハっ、いいねえ〜わかつてきたじゃねえか。あれこれ考えんのは後回しだ、今言えんのはただ一つ……」

「この戦いは、」

「この喧嘩は、」

「俺が勝つ!?!?!?!」

そして二人は戦い（喧嘩）を続行する

「そこまでだ。騎士ゼスト、」

ハズだった。

突然現れたモニターに映るジェイル・スカリエッティの介入が無ければ。

スカリエッティは驚くカズマを無視してゼストに話しかける。

「悪いが騎士ゼスト。君に熱くなれるほどの感受性ができたのは良いことだが時間だ。それともルーテシアを一人にする気がい。」

「……………貴様がそれを言うか、」

ゼストはスカリエッティの言いぐさに腹が立ったが、確かにルーテシアを一人にするわけにもいかないのしぶしぶあらかじめ設置しておいた転移装置で消える。

それを確認するとスカリエッティが映っているモニターがカズマの方を向く。

「さてとりあえず自己紹介からだね、私は」

「何が自己紹介だ！、いきなり出てきて俺とおっさんの喧嘩を邪魔しやがって、」

それに加えて自分の存在を無視してあっさりとゼストが帰った事によりカズマのイラつきはますます強くなる。

「おお、随分と嫌われたもんだね私も。頼むから一つだけ質問させてくれ。」

その時スカリエッティの雰囲気が変わる。先ほどまでの友好的なものとはまるで違い今はその鋭い目つきだけで常人ならすぐみ上がってしまうほどだ。

カズマは瞬時にこちらの顔が真のスカリエッティなのだと理解する。

「……………言ってみな、」

「何故それだけの力を持ちながら時空管理局の、いや機動六課の犬に成り下がる？」

「……………俺はあいつらの犬にも仲間にも味方にもなつた覚えもねえ。ただこっちじゃやる事が無いからダチみてえに連つるんでるだけだ。」

カズマの答えはスカリエッティにとっても意外であった。

もちろん犬という表現はカズマのような人間の一番嫌いな言葉なので否定されるのはわかっていたが、

「ただし俺は俺の背負った物やダチに手え出す奴はどこぞの誰だろうと叩き潰す、てめえらはもちろんそれがいづら（機動六課）でもな。」

「ふむ、……なるほど道理でそれだけの意志の具現化…アルターを使えるはずだ。」

そうそう彼の名前はゼスト、そして私はジェイルだ。また会おうカズマ君。」

カズマの答えに満足したのかうつすらと笑いながらモニターを消してスカリエッティは居なくなる。

「ゼストに、ジェイルか……」

カズマは敵がない事を確認すると右目を閉じ、右腕を包んでいるアルターの装甲を分解する。

それは粒子状に風化して再び集まりカズマの元の右腕を形作っていく。

だが元に戻った瞬間右腕に激痛がはしる。

「痛っ、がああああ！」

その痛みは今までもあった力の反動とはまるで違うものであった。カズマは痛みの正体を確かめる為に右手に付けていたグローブ（盗品）を外す。

するとそこには皮膚が無機質に、まるで金属のように変貌した右手があった。

特に手の甲は酷く、彼のアルターを思い出させる装甲とネジのような物が生えている。

アルター使いは人間ではない、それがカズマの住んでいたロストグラウンドと敵対する本土の考え方だが本土と闘い続けている自分がそれを体現した事をカズマは皮肉に思う。

「くそ、わかつちやいたがいよいよ化け物じみてきたな、俺も。ぐっ、」

そして再び襲いかかってきた痛みに右手を押さえてうずくまりしばらく動けずにいた。

sideスカリエッティ

とある研究室のような場所に先ほどまでモニター越しにカズマと話していたジェイル・スカリエッティ本人がいた。

彼の前にある巨大なモニターにはカズマがアルターを分解し、シエ
ルブリット（第二形態）へと進化させるシーンがスローモーション
で映し出されている。

モニターの端には大量のグラフや数値が並んでおり、スカリエッテ
イはその全てを見ながら映像自体も見るといふかなり器用な事を行
っている。それほどまでにこの目の前の現象は彼の興味を引くに値
するものであった。

「素晴らしい、やはり彼に騎士ゼストをぶつけて良かった。彼が来
た事で時代の変わり目までの時計の針を随分と進める事ができる。
ウーノ、」

スカリエッティにウーノと呼ばれた女性は手元の解析結果の書かれ
た資料を読み上げる。

「はい、結果は少年が使う光る右腕と例のサンプルの波長が79、
8%も一致しました。」

るはやてにシグナムとヴィータが報告をしていた。

「じゃあカズマは単独で敵の罠に飛び込んで未だに音信不通ちゅうわけやな」

「もうしわけありません、主はやて。私が奴の単独行動を許したばっかりに。全て私の責任です。」

はやてにシグナムが大きく頭を下げる。
その拳は色が変わるほど強く握り締められている。

「まあまあ、まだ最悪の状況になったとは限らへんねんから。それにその時はそうするしかなかったんやろ。」

「そうだぜシグナム、だいたいカズマは何か言って聞くような奴じやねえだろ。それにこうしてる間にも帰ってくるかもしれないだろ、な」

ここが戦国時代なら切腹を始めそんな勢いのシグナムをはやてとヴィータが必死にフォローする。

「いや、ならこちらの通信に応答しない説明がつかん。恐らくあの馬鹿は捕まったのだらう、あれだけ大口をたたきながら、約束して

おきながら、あの男は……」

『誰が負けたってえシグナム。』

「「「!!!」」」

その声がしたほうを三人が同時に振り向くとそこにはボロボロで酷い格好ではあるが確かにカズマが立っていた。

カズマはそのままヨロヨロとした歩調でゆっくりとシグナムの元へと歩み寄る。

「どうだシグナム、ちゃんと約束は守っただろうがっゴッ」

カズマが言い終わると同時にシグナムの拳がカズマの右頬に繰り出された。

カズマは右目が見えないうえに完全に気を抜いていたので反応できるわけがなく、盛大にぶっ倒れる。

「「（痛そうだな（やな）あれ。）」」

「痛ってえな、何すんだてめえ。」

「貴様が調子のいいことばかり言うからだ。それに無事なら何故通

信に応答しなかった！」

「あの機械なら敵の攻撃でぶっ壊したんだよ。こっちだって大変だったんだぜ、喧嘩の後この場所がわかんねえからアルターまで使っ
て確かめたりよお」

「っ、だいたい貴様の行動で主たちがどれだけ心配したか」

「いや、うちは特に心配はしてなかったんやけど。」

カズマとシグナムの怒鳴り合いが終わりそうもないのではやてが口
を挟む。

「主はそうでもヴィータたちは」

「あたしもカズマが負けるわけねえって分かってたから特に心配し
てねえよ。」

シグナムは素直に自分は心配したって言えよ。」

「なっ！！！！」

「なあなあカズマ、シグナムも言っとったけど約束って何のことな
ん？」

はやてはこの会話が始まった時からずっと気になっていた事をカズマに聞く。

「ん、いや別れ際に少しな、よく覚えてねえけど確か生きて“ここに帰って来ないと許さないとかだったぜ”

「生きて“私の元”に帰って来ないと許さないやて!!! シグナムってば大胆やな〜」

「主はやて!!! 少し、というか大分意味が変わってる気がするのですが。」

シグナムは顔を赤らめて自らの主に抗議する。

ヴィータは今この場では自分が一番大人ではないかという、普段では絶対に味わえない優越感に浸っていたとか。

第十一話・接触（後書き）

今回のポイントはカズマが完全な機動六課の味方では無いという事です。

次の話はいよいよ作者が今一番書きたい悪魔編？です。

あとリクエストされたシグナムとのからみはこれで良いですか？
（聞くな）

第十二話・2人の弾丸、2人の兄貴（前書き）

もついつまでに書くなんて言わないよ絶対いゝゝ

10周年プロジェクト本気で楽しみだな

第十二話・2人の弾丸、2人の兄貴

ホテルアグスタから戻ったその日はさすがに訓練は無く、カズマを含めフォワードたちもすぐに解散となった。

カズマも日々の日課に成りつつあるシグナムとの喧嘩（模擬戦）が無いので少し物足りなさがあったが、右腕の調子が悪いので素直に休むことにする。

悪いといっても痛みは大分おさまったのだがいかんせん力加減が全く出来ない。

それは隊舎に帰ってくる途中のへりの中で手すり（金属製）を軽く握っているつもりが気が付いたら握りつぶしていたほどだ。

余談だがそのことで名前も覚えられてない某へりパイロットがあまりにも口うるさく文句を言ってくるので、右手でデコピンをかますとものすごい音と共に口から泡をふいて倒れた。

……おそらくシリアスなシーンなら死んでいただろう。

カズマは早々に現場を後にして部屋に戻り仮眠をとろうとする。この症状が寝て治るものではないことはさすがにカズマも分かっているがこれ以外の術を彼は知らない。

はやての部下である医師っぽい女（名前は忘れた）には以前に顔にはしるアルター痕の事を聞かれたが、とっさにこっちに住む人間は全員こうだと嘘をついたので何も言えないし言うつもりもない。

「らしくねえな、マジで、らしくねえ」

そんなことをつぶやいているうちに重い足取りながらも、カズマのあてられた部屋の前に着く。

そして扉を開けて部屋に入るとそのままベットに倒れこむ。

そして右腕を天井に向けて突き出して人差し指から順に握り込み、ふとポツリとつぶやく。

「死ぬのが怖いわけじゃない……。ただ何の証も建てないまま朽ち果てるのは、それだけはごめんだ。」

カズマは本来ロストグラウンドで闘い続けて死ぬはずだったのだ、

そこに彼がいた証を建てる為に、

はやての話ではカズマのいた世界はまだ見つかっておらず、10年単位で考えていく必要があるらしい。

だがカズマの体はアルターの使いすぎでボロボロになっている。後10年も生きていられるかも彼自身分からない、それを右腕の痛みで改めて思い知らされた。

力を使い続けると確実に死ぬという事実はカズマにとってこの際ど

それどころか…この大地からあなたの温もりを感じることにすら今の私には出来ません。

ああ、愛しいあなた、あなたはついに強大な力の前に倒れてしまったのでしょうか、

それともあなたは未来無き闇に覆われてしまったのでしょうか、

だとしたら私はあなたの足元を照らす光になりたい。

愛しいあなた、

私のあなた、

どうか無力な私を、あなたがあなたでなくなってもそばにいたいと思う私を許して下さい。

そしてどうか無事でいて下さい、私の………カズくん”

///
///
///
///
///
///
///

カズマが目を覚ますと何故か腹部に鈍い痛みが走ったがそれよりも
気になる物が目の前にあった。

机の上には寝る前には無かったサンドイッチと小さなメモが置いて
ある。

とりあえずメモを手にとってみるが、残念ながらそこに書かれてい
る言葉は彼の知っている文字ではなかった。

「何だよコレ、つゝか俺こっちの字読めねえんだけどな。」

実は日本語？すら怪しいのは秘密だ

ひとまずメモは置いといて、小腹がすいたので一瞬に置いてあった
サンドイッチをつまむことにした。

「何だこれ、かなみレベルじゃねえか、見た目も味も。」

それが良い意味なのか悪い意味なのかも秘密だ。

ぶつぶつと文句を言いつつサンドイッチを食べながらメモを眺めていると、どこか見覚えのある絵が描いてある事に気が付いた。

10分くらい悩んだ末にカズマはそれが機動六課に来てから使っているシャワールームだと気が付く。

カズマはかなり怪しいとは思いつつも、特にすることも無く暇なのでそのシャワールームに向かう。

その道中彼が密かに期待したようなこともなく、どことなく拍子抜けしたが無事に目的の場所に着く。

このまま何も無かったらさっさと部屋に戻って寝ようとした時、

「お、何しとるんやカズマ」

ある意味でカズマが苦手な人物であるはやてがどこからともなく現れて白々しく話し掛けてきた。

カズマは思いっきり顔をしかめつつも言い返す。

「何が何しとるんやだ、どうせあの紙切れはてめえだろうが、」

「まあこんなタイミングで出てきたらそりゃバレるわな。」

なんていつかえらい荒れとるように見えたからな、何かあったんとちゃうか？」

「別に荒れてなんかねえよ……俺は元々荒い性格なんだよ」

「そうなんか、ホテルアグスタで力を使ってから急に……」

そこまで聞いてカズマははやての言葉に違和感を覚える。

それは普段の彼なら気にもせず、気づきもしない小さな事だ。だがある言葉に敏感になっている今だからこそ気付けた

そしてその違和感を確信に変えるべくカズマは言葉を告ぐ。

「なあ、もうこんな三文芝居は辞めようぜ八神。」

で、どこまで知ってたんだよ。」

カズマは何時になく冷たい目ではやてを見る。

その時はやてはごまかせないと思ったのだろうか、顔が先ほどまでのおちやらけた表情と打って変わって引き締まる。

「……あなたの使うアルターって力は副作用が強いこと、ついでにあんたの体はすでにそれでボロボロつてくらないやな。

……ほんまにあんまり無茶したらあかんで。」

「この前のへりん中といい今回といい、あんまり俺に干渉してくんじゃねえよ。だいたい何で知ってんだよ、ストーカーかてめえは」

はやての応えに対してカズマは無性に、意味もなく腹が立った、そしてまるで近づく者全てに噛みつく獣のような顔ではやてを睨む。

「む、確かに毎時間監視はしとるけどストーカーとはひどい言いよ
うやな。

……まあ強^しいて言うならうちはんたに期待しとるんや、

「あんたが……を壊してくれんかをな」。

「

一瞬はやてがひどく悲しい顔をした事にカズマは驚き、顔から毒が抜ける。

「……………八神、お前。」

カズマでさえはやての……を壊してくれという言葉の異常性が分かる。

それは明らかに八神はやてという人物の口にしていい言葉ではなかった。

「まあまだ頭が冷めへんのやったら訓練所に行ってみ、うちが言いたかったんわそれだけや。」

はやては先ほど見せた表情を微塵も感じさせない顔で、何かをこまかすようにその場を後にしようとして歩き出す。

「つまり、訓練所に行けっつーことか。たく、なんで俺が」

カズマはぶつぶつと文句を言いうもの、はやての先ほどの表情を思い出すと無視して部屋に帰るのは激しく気が引ける、

彼は善人でもないがどんなに悪ぶろうと悪人にはなれない、つまりお人好しと呼ばれる人種である。

カズマは遠ざかっていくはやてに声をかける。

「黙ってた事やこれからの事に何も言わないってのはありがとな、あとはその開きっぱなしの口でベラベラと他の奴に言うなよ。」

それを聞いたはやては振り返って

「分かつとるよそんなこと」

とだけ言って再び歩き出す。

少なくともその顔からは悲しみは感じ取れなかった。

カズマはつくづくお互いにめんどくさい性分をしていると思った。

「たく、呼び出すなら最初からこっちにしろってんだ。ん、あれは」

カズマが訓練所に向かうとその扉の前に、わずかに扉を開いて中の様子を心配そうに覗いている青い髪の少女がいた。

カズマは面白いものを見つけた子供のような顔をし、こっそりと少女の背後に忍び寄ってから話しかける。

「よう、何やってんだスバル」

「ひゃつ、カ、カズマさん。驚かさないで、じゃなかった静かにして下さい。」

スバルは声を掛けられた瞬間に飛び跳ねるほど驚くものの、何かを思い出したかのように人差し指を口元にかざして静かにしてくれとジェスチャーする。

「わかった、悪かったよ。後カズマで良いって別に、」

「本当に分かってますか？名前ですけどカズマさんって呼びやすいんですよ。なのはさんみたいです。」

スバルは自分の反応が面白いのかヘラヘラと笑っているカズマが本当に分かっているのか少し不安になる。

「あれと一緒にされるのはちょっとな、で、結局何見てんだよ。」

カズマはスバルの頭の上に顔を乗せるような位置から一緒に扉の間から中の様子を覗き込んだ。

そこには一人で黙々と訓練を続けるティアナが居る。

その姿はどこか鬼気迫るものがあり、近づきがたい雰囲気すら感じ

られた。

「あれは……ティアナか、なんであいつこんな時間に、」

「ティア……ティアナは一人で毎晩遅くまで自主練をしてるんです。なのはさんや私がいると体を気遣われるから。」

スバルは自分の言葉にどこか落ち込んでいるようにも見える。
おそらくパートナーの力になりたいがそれができないので悔しいの
だろう。

「はあ、それであのマズいサンドイッチってわけか、八神の野郎
ハメやがったな。」

カズマはため息をつくと扉を開けるために手をかける。

当然スバルはカズマの行動を止めようとする、

「カズマさん、何しようとしてるんですか、」

「何ってそんな大したことじゃねえよ。まあ心配すんなって、な」

カズマはおそらく機動六課の誰もまだ見たことが無いような優しい目をして、左手をスバルの頭にポンっと置く、

スバルはカズマの目を見る。

たったそれだけでその時のスバルは目の前にいる男なら何とかできると、何の根拠も無く思った。

奇しくもそれは彼女の姉がカズマに受けた印象と同じものであった。

彼はそのまま扉に手をかけ、その扉を開く。

カズマは扉を開けている途中、再びいまの行動は自分らしくないと思った。

だが他人ごとというには彼女たちに関わりすぎてしまった。

見て見ぬ振りをし、投げ出すには彼女たちはあまりに似すぎていた。

“けどよ、たまにはこういうのも嫌いじゃないし悪くもない。

そう思うだろう、お前も”

／／／／／／／／／／／

まあ当然といえば当然だが突然部屋に入って来たカズマに対してのティアナの反応はあまり良いものではなかった。

ティアナははつきりと敵意のようなものを込めた目でカズマを見る。

「何しにきたのよこんな時間に、それともあんたも体を壊すって忠告しに来たの？」

ティアナの言いぶりからなのはたちに散々注意を受けてきたのだろう。

「はっ、お前の体をどうしようとお前の勝手だろ、ただブラブラしてたらここに着いただけだ。」

カズマは何でも無いように応えたのだが、ティアナの表情はいくらか拍子抜けしているがそれ以上に驚きの感情を感じ取られた。

恐らくなのはやその他大勢に一方的に忠告され続け（それはある意味彼女たちが優しすぎるだけだが）、そういうふうに言ってくれる人がいなかったのだろう。

だがカズマは体を気遣えなんてことは絶対に言わない。

それは彼自身が命を削って力を使っている事もあるが、ただ前に進もうとあがいている奴をカズマは嫌いじゃないからだ。

たとえその方法がどんなに危険で効率的じゃなくともだ。

「私の邪魔だけはしないならいいわ、私の言いたいのはそれだけよ。」

それだけ言っつてティアナは再び自主練を再開する。

つまり邪魔さえしなければここに居ていいということだろう。

うんざりするほどされてきた忠告をカズマがする気がないと分かったからか多少警戒心も薄れているらしい。

「そうかい、そりゃあ良かった。追い出されるかと思ったからな。」

カズマはティアナの邪魔にならない程度に距離をとり、その場にあぐらを組んで座り込む。

「あんたは頑固そうだから言っつてもどうせ聞かないでしょう？どっかの馬鹿と同じで。だから諦めただけよ。」

「へっ、そうかいそりゃ悪かったな、あと俺は頑固じゃなくて人の話を聞かないだけだ。頑固さならてめえの方が数段上だよ。」

「ふふ、なによそれ、でも私が頑固つてのは否定しないわ」

この時初めてティアナが気を緩めわずかだが笑った。しかしそれも数秒ですぐに顔を引き締め自主練に集中する。

それから10分間、ティアナは自主練をしカズマはティアナを、正確にはティアナの目を見るだけの時間が流れる。

カズマはティアナの目から何かかつての自分に似た焦りのようなものを感じる、

自分とは違い時間などいくらでも有る少女からだ。

カズマははやての時と同じくストレートに聞いてみることにした。

「なあティアナ一つ聞いていいか？」

「何よ。」

ティアナは自主練を続けたまま簡単に応える。

「お前は何で焦って、いや違うな。……お前は何を背負ってるんだよ。」

その言葉を聞いた瞬間ティアナは今まで止めなかった自主練の手を止める。

そしてティアナはその手に握る拳銃型のデバイスをカズマに向ける。

「何で私があんたにそんな事教えなきゃいけないのよ!！」

ティアナは叫んだともいえる声でカズマに言う。

ティアナ自身も今自分の中に有る感情は分からない。

だがそんなに仲が深い訳でもないこの男に、

何時もフラフラして喧嘩以外で真剣さを感じられないようなこの男に、

自分の背負っている大きなものを、自分の中身を理解されたようで腹がたった。

自分の背負っているものは誰でも簡単に理解されるほど小さくないと心の中で叫んだ。

「何でってそりゃ俺が気になったからだよ、お前は俺がこつちで一番最初に名前を刻んだ奴”なんだからよ”」

だがカズマはデバイスを向けられたというのにまるで気にしていないかのように応えた。

そのことがティアナには理解できなかった。

カズマのいた世界には魔法文化が無いとはいえ銃はある、よって威嚇としてはなのはに杖型のデバイスを向けられるよりも、彼にとっでは自分の拳銃型のデバイスは効果が有るはずなのに。

しかも聞いた理由が一番最初に名前を覚えた（刻んだ）奴だから気になったという程度。

勝手に叫んだ自分が馬鹿みたいだ。というより馬鹿馬鹿しさを通り過ぎてむしろ清々しかった。

よくよく考えると何故自分はこの男の言葉でここまで熱くなってしまったかわからない。

いっそ目の前の男に全てぶちまけてしまったほうがマシかもしれない、先ほどのような醜態をさらすよりは。

そう思うと急に体が軽くなったような気がする。

そしてデバイスを下ろすとカズマの横まで行って隣に座る。

その顔に先ほどまでの敵意は無い。

「さっきはごめんなさい。あんな事して。」

自分でもコロコロと態度が変わるとティアナは思った。

「気にすんな、向こうじゃそいつを向けられる事なんざしょっちゅ

うあるからな、慣れちまった。」

「話すわよ、謝罪代わりといったらなんだけど。それにあなたにはスバルのことで借りもあるしね。」

「そうか、何の事かわかんねえけどそいつは良かった。」

「私ね、昔は兄さんがいたの、」

どこか懐かしむような、つきものが落ちたような顔で語り出す。

いわく両親はいなく兄と2人で暮らしていたこと。

自分の射撃などは管理局に勤めていた兄に習ったこと。

その兄がとある事件を追っている途中で殉職し、その時の上司の言葉が彼の死を侮辱するものだったこと。

「私はその言葉が許せなかった、だから私は強くなりたいのよ、ランスターという名を世間に知らしめるために、兄さんの、兄さんに教えてもらったランスターの弾丸を貫き通すために。」

ティアナは自身の背負っているものを話し終えると少しスッキリした表情をしていた。

「いやはや、ここまで似てるとわな。いいぜ気に入った、特に兄貴や弾丸のくだりなんか最高だ。高町の奴や他の奴に何言われようがな、自分がこうと決めたら妥協すんじゃねえぞ、俺に言えるのはそんぐれえだ。」

カズマは何かを重ねているようにも見えた。

本当に目の前の男の応えは本当に予想外なことばかりだとティアナは思う。

だがその応えは気遣いの言葉の何倍も聞いていて気持ちが良いものだった。

そしてふと気になった。

「ねえ、次はあんたの番ね、私は話したわよ」

「俺か、俺は別に話す事なんか何もねえよ、ただフラフラして喧嘩して、くだらねえ事ばかりだったよ。」

ティアナはすぐに絶対に嘘だと思った。

少なくとも何も無い平和な日々を過ごしている者に“何を背負っているか”なんて質問はできないだろう。

「それでも良いから聞きたいのよ、ね、誰にも言わないから。」

カズマは心底めんどくさそうな顔をするが観念したのか、

「たく、しゃあねえな、おいスバルどうせならお前もくるか？」

カズマはあろうことかこの場に居ないはずの少女の名を口にする。その言葉でティアナが入り口の扉の方を見るとそこには扉の前で入りにくそうにしているティアナもよく知る、先ほどカズマに名前が呼ばれた少女が立っていた。

「あんだ、何でここにいるのよ」

「えっと、その、それは、ティアナが心配だったから。」

スバルの最後の方の言葉は声が少しずつ小さくなっていき聞き取り辛い。その様子はまるで主人に叱られている子犬のようであった。

その様子にティアナは怒る気も失せた、というより元々怒る気などなかったが。

「ティアアでいいわよ、別にもう。それに怒ったりもしないわ。心配かけたわね」

「ううん、いいよ、私とティアアはパートナーだからね。」

スバルは今まで禁止されていたあだ名で呼んでいいと言われたことや、氣遣われたことを心底嬉しそうに笑う。

「おい、眠いんだ早くしてくれ、お2人さんよお」

2人してカズマをほったらかしにして話し込んでいたことに気づく。すぐさまティアナとスバルは2人で並んでカズマの前に座る。

「ほら、早く話しなさいよ。」

「ははは、お願いします。」

スバルはすまなさそうに、ティアナは……言わずもがなだ。

「たく、まずは…ロストグラウンドつつ場所が有ってな……。」

アルター能力を持つせいで天涯孤独の身であったカズマが、その後兄貴と呼び憧れた男との出会いと別れ。

その何年後に出会った、唯一相棒と認めた青年と守ってやりたい存在である少女との出会い。

その二年後に全ての始まりでありボロボロにされた喧嘩。

HOLYとの壮絶な死闘。

相棒や悪友、少女との別れと再会と再び別れ。

そして最後に全てのけじめとしての大喧嘩の話になる。

「……………宇宙から落っこちても全身のアルターが無くなるまで奴と殴り合った、その後も生身で殺す気で殴り合って2人してぶっ倒れてな、

結局どっちが勝ったかわかんねえんだ。」

「……………。」

カズマが全てを語り終える頃にはティアナもスバルもその壮絶な過去に言葉が出なかった。

スバルは話しの途中に、涙目になったり懂れたのか目をキラキラと輝かせたりと感情豊かな顔で聞いていた。

一方ティアナは兄貴のくだりは親近感がわいたのか真剣に聞いていたが、カズマが再隆起さいりゅうきを起こした辺りから顔を引きつらせて、宇宙で殴り合った話しかから完全に顔が強張っていた。

というよりカズマの話しから惑星レベルで危ない喧嘩に自分の常識が崩れ去っていくのが分かった。

あとティアナの中の“ボケたら世界が危ない人ランキング”が一位の高町なのは抜いてカズマが堂々の第一位にもなった。

「もういいだろ、俺は帰って寝るぜ、やることやったしな。」

カズマは疲れた様子でゆっくりと立ち上がり部屋に戻るために入ってきた扉に向かって行く。

その様子をティアナとスバルは見ていたのだが、何を思ったのかスバルがカズマの前まで行っていきなり頭を下げる。

「私に戦い方を教えて下さい。お願いします。」

「前にも言ったけどよ、近づいて殴られてくらいしか無理だぜ俺には、」

「それでも構いません。ティアのパートナーとして私も強くならなきゃいけないって思っただんです。」

「おいティアナ、お前もなんとか言えつて、相棒をこんな奴に任せたいのかよ。」

呆れたようカズマは後ろを振り返ってティアナに助けを求める。だが彼女から彼の期待した返事は得られなかった。

「良いんじゃない別に。スバルがそう決めたのなら。それに一回決めたら誰に何を言われても妥協したらいけないんでしょ？」

はあ、とため息をついてカズマはスバルの方へと向き直る。

そしてそのまま自らの右腕の袖をまくりだす。

「俺はこんなになっても力を使うような馬鹿だぜ、それでもやるのか？」

カズマの右腕にはまるで針金でできた回路のようなアルターの跡が無数に走っていて、皮膚も人肌独特の柔らかさをまるで感じないほど荒れ果てていた。

それを見たスバルは一瞬体をビクツと震えさせたが、すぐさまそれを止めてカズマの目を真っ直ぐ見る。

それがスバルの答えだった。

それをカズマはしっかりと目を見て感じ取る。そして唐突に話し出す。

「悪かったな、気味悪いものを見せてよ、じゃあまずは試しに喧嘩でもすっか？」

それだけ言うとカズマは右腕の袖を直し、周囲の物質を分解してアルターを発動させ、スバルと一定の距離をとる。

それがカズマの答えだった。

「はい、ありがとうございます!!。」

それを見たスバルは本当に嬉しそうに頭を下げ、すぐさま自分も自らのデバイスを右腕にまとわせる。

そこでカズマは本来の目的であったはずの一人が余っていることに気が付いた。

「おいティアナ、お前も混じれよ。」

ティアナは何で自分かと思っただが、このままではパートナーに実力で置いて行かれるとも思ったし、スバルの「頑張ろうねティアナ」という言葉で断る気も失せた。

「分かったわ、でもやるからには本気でいくわよ。」

「当たり前だろ。見せてやるよ、兄貴譲りの衝撃のファーストブリット。」

カズマはシェルブリットの拳を人差し指から順に握り締めて作る。

ただ前を見る、若者たちの夜はまだ終わらない。

次の日の早朝

シグナムとなのはは上司である八神はやてから呼び出しを受けていた。

それも彼女の執務室ではなく訓練所にある。

「何でだろうね？」

「さあな、だが主も考え有ったことだろう。」

そうこうしているうちに訓練所の前に着く。

そして扉を開けて中に入った。

「はやてちゃん、入るよ」

「主はやて、何用ですか？」

しかし2人の言葉も虚しく肝心の八神はやては何処にもいなかった。

「うむ、いったい主はやては何処に。……………どうした高町。」

シグナムは隣に立っているのはが何も言わずにただ呆然としていることに気が付いた。

そしてその視線をたどると原因がすぐ分かった。というか自分も呆然とした。

その視線の先には、大の字に寝っ転がって寝ている少年と、…………彼の腕を枕にして（幸せそうに？）一緒に寝ている2人の少女がいた。

なのはとシグナムはふと自分に問いかける。

「（何でだろうっ？、）」

「（自分でもわからない、）」

「（けどこれだけは分かるよ）」

「（あれを見ていると）」

ついに感情が高ぶって声に出だした。

「ムカムカする、」

「腹が立つ、」

「「この気持ち、理屈じゃない!!」」

2人がデバイスを出したのは同時だった。

ちなみにこの後どうなったかも秘密だ。

第十二話・2人の弾丸、2人の兄貴（後書き）

本当は補足というかおまけ（部屋でカズマが起きるまでの）が有ったけど長くなるので削った。

それよりも実はこの s・CRY・eders は最初はティアナがヒロインの“予定”（重要）だったんだぜ、いやマジで。

だって過去がカズマでその他が君島設定の女性ですよ彼女。

スターズがカズマを見つけたのも、そのせい。

でも作者の実力じゃ絡むことすら無理だったんだ。

あとフラグ建てるの楽しかった。特にシグナム。

フラグといえはやてとスバルは特に建てたつもりはありません。

意味もなく仲が良い、そんなポジションです。

第十三話・銃と拳と拳と剣と（前書き）

人の笑うという行動は獣が牙をむく動作からきているらしい、これ聞いた時カズマが喧嘩で笑ってるのがすんごい納得いった。

第十三話・銃と拳と拳と剣と

「ではやはりテストはエースオブエースが適任か、」

「はい、こちらではすでにその舞台を作りにかかっています。」

「そうか、くれぐれも被験者とエースオブエース、及びその周囲の人間に気付かれぬように頼むよ。」

「……………はい、心してかかるつもりです。」

〈機動六課食堂〉

ちよつど昼間である今、食堂はもともと人々が集まりにぎやかになる場所であり、それはミッドチルダでも変わることはない。

そんな食堂の一角、そこにはスバルとティアナのスターズメンバーとカズマがテーブルに着いていた。

彼らは秘密の特訓組もとい、起き抜けになのはの砲撃をくらい仲良く二度寝するはめになった三人組である。

スバルとカズマは飢えた獣のように目の前の食べ物にがつついて、それにティアナが呆れたような視線を（実際に呆れているが）送っている。

「んでよ、結局何で高町やシグナムのやるーがキレたんだ、やつぱりバレたんじゃねえか？あ、それくれよスバル。」

「ん、それは無いんじゃないですか、バレてたら説教があると思いますよ。そっちのと交換ならいいですよ。」

「これか？まあいいか、ほらよ。」

そう言うとカズマは、自分の皿の中からスバルが指定してきた串にいろんな食べ物が刺さったものを左手でつまみ、スバルの顔の前面にさも当然のように突き出す。

そしてスバルも何の躊躇も無く突き出されたものを串ごとくわえ、ゆっくりと顔を後ろに引くと串には何も刺さってなかった。

本人いわく戦闘機人の奥義らしくギンガもできるとの事だ。
実にくだらない。

「あひふあほうごはいまふ（ありがとごうございます）。」

スバルがまだ口の中のものを飲み込んで無いのに喋りだす。

「へいへい、それじゃあこれはもらっせ。」

カズマが左手に残った串をスバルの皿に有る先ほど取り引きした食べ物に差し、そのまま自らの口の中に入れる。

あ、間接キスだとティアナは思った。

とうにかさつきから観察してるとこいつら気持ち悪いくらい仲が良くないか？とも思った。

この前もスバルの姉であるギンガをおぶって機動六課に帰って来たので、もしかしたら自分の知らない所で相棒とこの男は交友があったのだろうか、

だとしたらそれはかなり……少しだけ寂しい。

「……………でよ、お前はどっと思うよティアナ。」

「……何がよ、」

どうやらカズマが話し掛けていたらしいのだがまるでティアナの耳には聞こえていなかった。

カズマはその反応に少し呆れたような顔をする。

はっきりいってスバル並みのこの男にこういう顔をされるとティアナにとっては屈辱だ。

「なんだよ聞いてなかったのか、ほらあれだ、何で高町やシグナムがキレたかだよ、俺もスバルもわかんねえんだ何かあったのか？」

「……そんなこと知らないわよ……!!」

ティアナはバンツと音が鳴るほど机を叩き立ち上がる。

「お、おう。そうかなら良いんだけどよ。」

カズマの引きつぷりと周りの自分への視線からティアナは自分のしたことを再認識して羞恥心から顔を赤らめながら座った。

この反応から分かるようにティアナは昨日の腕枕の事を覚えている。

まだ少し眠かったのだが、話し声のようなものが聞こえてきてうるさかったので目を開けると、すぐ目の前にこの男とその腕を枕にして幸せそうに寝るスバルが見えた、

そして次の瞬間目の前が桃色の光に包まれ今に至る。

もっともそれで何故なのはやシグナムが怒ったかまでは思考が追いついてないが、

(い、一生の恥よあんなこと。眠くてどうかしてたのよきつと、幸いこいつは気づいてなかったみたいだし、)

ティアナがなんとか平常心を取り戻しかけたその時、

「あ、もしかしてなのはさんたちも腕枕して欲しかったんじゃないですか？」

今の彼女にとって最大の爆弾をスバルが投下した、

「腕枕あ、何だそ「ガタツ」りゃ？」

カズマが質問を言いきる前にティアナがスバルの首根っこをつかんで席の端まで移動する。

そのあまりのスピードにカズマは呆然とした。

さらにこんどはスバルの襟をつかんで顔を近づける。

端から見れば恐喝にしか見えないだろう。

「（あんだ昨日の事覚えてるんでしょ、詳しく説明しなさい、後あいつに絶対言うんじゃないわよ、分かった？返事は！）」

「（わ、目が怖いよティア、分かった分かったから離して、苦しい）」

本当に苦しそうな顔をするのでティアナはとりあえず襟から手を離す。

ただしその目は獲物を逃さない獣のようだった。

「（えつとね、まず模擬戦をしてる途中でティアナが気絶してウイングロードから落ちちゃって、それをカズマさんが受けとめたんだけど）」
「おいちよつといいか？」は、はい？」

スバルの説明の途中で先ほどまで席に着いていたカズマが声をかけた。

「悪いんだけどよ俺シグナムに呼ばれてんだ、だから先に抜けさせてもらっぜ。」

「それはやっぱり私たちの……」

軽かった空気が一変して重いものになり、本当に聞きにくそうにスバルが聞いた。

その様はカズマも苦笑いするほどだ。

そしてそのまま左手をスバルの頭の上に乗せる。

「心配すんなって、もしそうだとしてもお前ら売るほど俺も堕ちちゃいねえよ。」

スバルは何か言い返そうとしたが結局何も言わなかった、言えなかった。

スバルが言いたいのはそういうことじゃないことくらい、そばで見ているティアナですら分かった。

そしてそのスバルのいだいている気持ちはティアナの中にもある、そもそも自分が勝手に始めた自主練に2人は協力してくれただけなのだから、そう考えると自分まで自然と表情が暗くなる。カズマもティアナのその様子に気付く。

「なにお前まで暗い顔してんだよティアナ、それとも何か、お前も心配してくれんのかよ。」

「誰があんたなんかっ」

カズマのニヤリとした顔が自分をからかっているように感じてついつい心もとないことを言ってしまう。

「そうそう、お前はそうやって可愛げのかけらもないくらいがちょうど良いぜ。」

カズマはそう言って笑いながらさっさと2人に背を向けて歩いて行ってしまう。

ティアナは自分中でのカズマのイメージが昨日と今日でずいぶんと変わったような気がした。

最初は自分勝手に傲慢で、力で何でも片付けようとする馬鹿といふかなり悪いものであった。

それゆえなのはやシグナムといった真面目人間と仲が良い理由が全くわからなかった。

だが実際に話してみるとそんなに悪い奴でもなかった。むしろ何処までも真っ直ぐな、理不尽な世の中に馴染めない不器用

な子供という印象を受けた。

そんな奴だからスバルもすぐに懐くんだと思った。

方向性はまるで違うがどこか真っ直ぐで子供っぽいところはそっくりだ。

右手で戦うと子供っぽくなり、左手で戦うと大人っぽくなるのだからうか

まあそんなことはどうでもいい、つまりほんの少しくらいならイメージを変えてやってもいいと、絶対口には出してやらないがそう思った。

「スバル、ほら続きは続き。」

「え、どこまで話したっけティア？」

まあイメージをどう変えるかはこの話を聞いた後でも遅くはない。

///
///
///
///
///
///

機動六課・訓練所

そこには2人の男女、カズマとシグナムが一定の距離をとってただ何をするというわけでもなく立っていた。

2人共機嫌が良いとはお世辞でも言えないが。

「で、何の用だよ。いつもの喧嘩ってわけじゃねえんだろ。ええシグナムさんよお」

いつまでも黙っているシグナムにしびれをきらしたのが、カズマは少々喧嘩腰で話しかける。

「ああ聞いてくれないかカズマ、何処ぞの教育に悪そうな男が教えた子たちにいらぬことをしてるようだな、そいつを叩きのめさなければならんだ。」

「そうかい、そいつは大変だな、なんたって今は人の寝込みを襲う不埒な騎士様がいるような世の中だからな。」

その言葉を境に一気にカズマとシグナムを包んでいた雰囲気が変わる。

「実はその男に一人心当たりがあるのだが、」

「こっちにも一人、いや二人も心当たりがあるぜ。」

「そうか、二人とは大変だな、」

「いいや、これから後一人にするから心配はいらねえよ。」

カズマは右手をギリギリと音が鳴るくらい握りしめる。

「では私も早く済ませるとしよう、ルールはいつもどおり遠距離攻撃は無し、それだけだ。」

シグナムはすぐさまデバイスを展開しその身に騎士甲冑を、その手に長年の愛剣を握りしめる。

「いつもどおりの殴り合いか、負けた方は口出し無しだぜ、
…やるか、」

「ああやるっ。」

2人は同時にすぐさま相手の下へ駆け出していく。
一方は相手を殴るために、片方は相手を切り裂くために、

カズマはまるで獣のように腰を曲げて走る、そして右腕は地面を削るように分解し少しずつ彼のエゴでできた鎧に包まれていく、その地面の跡は見えない剣を突き刺し引きずっているかのようだった。

シグナムはそれを見るとそれまでの脚でただ走るといふ移動方から飛行魔法に切り替え、高度を変えずにスピードだけを爆発的に早めて一気にカズマの前まで進む。

そしてそのまま懐に入り自らの愛剣をカズマに向かって振るう。

「な、てめえ、」

カズマは右腕のアルターの再構成を中断して、六割ほどしか完成していないその右腕でシグナムの斬撃を防ぐ。

だがシグナムの移動スピードを乗せた攻撃は不完全なシエルブリックでは衝撃を殺しきれず、軽く後ろに飛ばされる。

「そのアルターとやらは初動が遅いようだからな、そこをつかせてもらった。」

卑怯だと思っか？」

シグナムの言葉に反応するかのようにカズマは立ち上がる。それも嬉しそうに笑いながら。

「いいや、まだまだぬるくらいだ。」

「そうか、それは良かったっ！」

シグナムは再びカズマのもとまで駆け出し、アルターを再構成させる隙を与えないようにすぐさま斬撃をたたみかける。

カズマはなんとか不完全な右腕でそれをさばく。

だが少しずつシグナムの斬撃がカズマに当たりだしてきた。

それもそのはず、何故ならカズマには接近戦、それも連続的な攻撃に対して致命的な弱点があるからだ、

それをシグナムほどの実力者が気付かないはずがない、それはカズマが隻眼であることだ。

右側の視界が狭いだけでなく、距離感もわずかにずれる。

カズマが右目が潰れてからほとんど第二形態以降しか使っていないのもこれが理由である。

シグナムは右手で剣をそのまま振るう、つまりカズマから見て左側からの斬撃は奇しくもシエルブリットでさばかれる、
だがそれはシグナムも分かっていたことだ。

本命はこの斬撃の後に行うカズマの死角である右側に叩き込む蹴りだ。

そしてそれは思惑通りにカズマのわき腹にきれいに入る。
常人ならそれだけでもう立てないほどの蹴りが、

だがカズマはひるむどころかわずかに生まれたその隙にすぐさま殴りかかってきた。

シグナムはとつさに自らのデバイスでそれを防ぐが想定外のカズマの反撃は予想以上に重く、こんどはシグナムが軽く後ろに吹っ飛ぶ。

「はあ、やっと一発入れたぜ、くそ、こざかしいことしやがって、」

先ほどのカズマと同じようにシグナムも何でもないように立ち上がる。

「それは全力を出さん貴様が悪い、その気になればその右目も開くと聞いたぞ。」

「へっ、絶対てめえに使ってやんねえよっ」

カズマはシェルブリットで地面を殴りつけ、その反動で空高く跳び上がる。

「なら使わざるおえない状況をつくるだけだ。」

シグナムは飛行魔法でカズマのあとを追うように上空に飛び立つ。

ただしそのまま突っ込むようなことはせずにかズマの周りを縦横無尽に飛び交いタイミングを待つ。

そしてカズマの上昇スピードが零になった時、シグナムがカズマの背後に向かってスピードを上げながら近づいて行く。

そして対するカズマは腰をできる限りひねり無理やり肩の位置を、再構成を途中で中断したため二枚しかない紅い羽の位置を調整する。そして…

「衝撃のおおおおつ」

「紫電……っ」

カズマは紅い羽の一枚を緑色の閃光に変え真っ直ぐに突き進む。

シグナムは自らの剣に自身とカートリッジからの魔力を込める。

「ファーストブリットオオオオオオ！」

「っー閃！」

カズマの拳とシグナムの剣が空中でぶつかり合った。

その衝撃は辺りに空震が起きホログラムでできた窓ガラスなどが一斉に割れるほど凄まじいものだ。

カズマはシグナムに妨害されシェルブリットを完全に再構成できてないから、

シグナムはカズマが移動スピードが早くかったため魔力を込める時間が足りなかったから、

それゆえにお互いに完全な力を振るえているとはとてもいえないかった、

だがしかし今この瞬間彼らは純粹に自分と互角以上の相手の力へ賞賛を送っていた。

そしてその後考える事は言葉は少し違えど意味は全く同じ、

「この喧嘩（戦い）は俺（私）が勝つ！！」

今の2人にはこの喧嘩の始まった理由などどうでもいいのだ、どうでも

そんなことを気にしていた2人はもういない、

此処にいるのはただ今という瞬間を楽しもうとする戦闘狂だけだ。

2人は激突した後もどちらも一步も譲らずに、カズマは緑色の閃光で、シグナムは自らの飛行魔法で 相手にぶつかり続けていた。

だが2人の使う力の違いが出たのかカズマを押し進めていた閃光が消え、均衡していた力のバランスが崩れる。

カズマはもちろん勢いをなくして空中で静止したのだが、シグナムも不意に抵抗する力が無くなったため体制を崩し空中でカズマに倒れ込みそうになる。

それはシグナムにとっても、カズマにとっても予想外の出来事だった。

カズマはその隙に右腕でシグナムの襟首辺りの騎士甲冑をつかむ。

「しまっ、」

シグナムはすぐさまその腕を振り払おうともがく、だがそれよりも早くにカズマが動いた。

「続いて、撃滅のセカンドブリットオ！」

カズマはシグナムの襟首をつかんだまま最後の羽を閃光に変える、そしてその推進力で2人の体は空中で独楽のように回転しながら地面に向かって加速していく。

その様は緑色の光に包まれた彗星のようであった。

そしてその彗星はそのまま地面に強く激突し砂煙を大量に巻き上げる。

その衝撃は凄まじく機動六課の隊舎全体がわずかに揺れたほどだ。

砂煙が晴れると巨大なクレータがあり、その中心には右腕を地面に突き刺し膝を着いてカズマだけがそこにいた、……そうカズマだけがそこにいた。

カズマのシエルブリットの拳の中には先ほどまで握りしめていたシグナムの騎士甲冑の一部が有り、

その切れ端は破れたというよりも切り裂かれたような跡であった。
つまり、

砂煙が完全に晴れきったその瞬間、襟首の辺りだけ裂けた騎士甲冑を着たシグナムが現れカズマに向かって駆け出す。

シグナムはシエルブリットを振り払うのは無理と判断し、掴まれている騎士甲冑自体を切り裂いてカズマを回転から抜けだした。

だがやはり無傷という訳ではなく、カズマとは別の方向に墜落し全身を打った上に、極度の回転によるめまいと吐き気にも襲われた、

しかしシグナムはその精神力と強化魔法を駆使して立ち上がったのだ。

それを見たカズマはすぐさま自分も立ち上がるうとしたが、元々シグナムに与えるはずだった衝撃は思ったより大きかったらしく、脚の痺れが強く全く動けなかった。

それを見た瞬間シグナムは自身の勝利を確信する。

「この勝負、私の勝ちだ！」

シグナムの中で膨大な充実感と満足感、そしてほんの少しの寂しさ

が生まれた。

それは好敵手に対しての期待の現れだった

そしてそのままシグナムはカズマが自身を守るために盾のように構えた右腕に愛剣を振り下ろした。

「悪いな、“俺の”勝ちだ！」

カズマの獣のような声が辺り一面に静かに響く。

その時シグナムには理解できないことが起きた。

自分に勝利をもたらすはずの剣の刃がカズマの右腕に触れた瞬間に虹色の粒子となって消え、

カズマのシェルブリットを完全な姿に再構成させた。

カズマはシェルブリットの拳を握りしめる、すると腕の鎧が展開しより攻撃的な姿に変える。

脚が動かなくても関係ない、何故ならカズマにはついさっきできた

そしてそのままシグナムごと拳が壁に盛大に激突した。

しかし壁がその衝撃に耐えきれずに崩壊し、その先にあったシャワールームに2人して突っ込んだ。

そこは誰も使ってなかったから良かったものの、もし誰かがいたら大惨事になっていただろう。

しばらくして見事に排出口がもげて壊れたシャワーから水が吹き出し、カズマとシグナムを頭からずぶ濡れにする。

カズマは自分を濡らした犯人であるシャワーノズルを見上げ、疲れたようにつぶやく。

「頭冷やせてか、冗談きついで、くそ。」

「ガフツツ、カズマここはどこだ、」

「ずいぶん早いお目覚めで、立てるかシグナム？」

カズマはシグナムに左手を伸ばし掴まるようにいう。

「ああ、痛っ！！」

だがシグナムはカズマの左手を掴み立ち上がるうとするが体に強烈な痛みが走りそれもままならなかった。

「悪いな、女を全力で殴ったことねえからな、ほら」

カズマは痛む体を無理やり立ち上がらせシグナムに背中を向けてかむ。

「……………カズマ、それは何のつもりだ。」

「何って歩けねえんだろ、早く負ぶされよ。」

「いや、しかしな」

カズマの要求をシグナムはひたすら渋る、その様子をじれったく思ったのか、

「ここにいと濡れるんだよ、早くしやがれ！それとも、」

「わっ、な何をするカズマ／＼／」

カズマは体をシグナムの方向に向き直し、両手でシグナムを持ち上げる、俗に言うお姫様抱っこというやつだ。

「こっちの方がいいかい？」

「……………背負う方で頼む、」

カズマが一步踏み出すたびに濡れた靴がベチヨベチヨと嫌な音をたてる、

2人を見た通りすがりの人たちは揃って奇異の視線を送っていた。

それもそのはずである、あのシグナムが誰かに背負われているというだけでも目立つというのに、2人が共にびしょぬれで服も（特にシグナムが）所々破れているからそれはもう盛大に目立つ。

「お、重くないか？」

「重てえよ、しかも全身がめちゃくちゃ痛てえ」

「そ、そうか……重いのか」

「なあシグナム、もし俺があいつらの何かを壊そうとしたら、そんな時は腕ぶった切っても止めてくれ。」

「ああ、約束するよ。」

「なあカズマ、お前はそのままここに……いや、止めておこう。敗者は口出し厳禁だったな。」

「おう、わかってんじゃねえか。」

2人は先ほどとは別人のように緊張感のない緩みきった顔をしていた、そしてカズマの脚は少しずつだが医務室に向かって進んで行く。

もちろん後で2人は仲良くありがたい説教を受けることになるのだが、

その際に何故このようなことをしたのかという質問に2人は口をそろえてこういったという。

「「イラついている時に目の前にこいつ（カズマ）が居たからだ。」

／／／／／／／／／／

「まあ、あくまでこのテストは通過点にすぎない、だがその道の先に最悪の結果が待っていた時は……」

「わかっているつもりです。この八神はやて、いえ機動六課がカズマ及びアルターなる異端能力者の殲滅を結構します。」

「よろしい、期待しているよ。」

モニターに映っている人物はそれだけ言うと画面ごと部屋から消え失せる。

その時この部屋の主である八神はやてはすぐそばにあった花瓶を向かいのデスクに投げつける。

ガシャンと派手な音をたてて花瓶は粉々になり、中から水が染み出しデスクから床に一定のリズムで滴が落ちる。

部屋は静寂に包まれ滴が床に落ちる音がこの場を支配した。

しばらくしてたった一回だけ“その音の間隔が早くなった”。

第十三話・銃と拳と拳と剣と（後書き）

カズマとシグナムの喧嘩はこんなに大きくするつもりはなかったのに、書いてたら勝手にこうなってしまうました。

だから何でコイツらこんなにマジで戦ってるのかは作者にも全く分からんね。

けど楽しかったから良し！！

最後の描写はわかりにくいね

第十四話・銃と拳と杖と（前書き）

ボツネタ

??「これが君たちの本当のプロフィール、

起動六課メンバー

設定年齢〃彼氏or彼女いない歴、かに座のB型あああ
」

「一同「い、陰謀だあああ（アニメスタッフの） 陰謀だあ（エコー）」

第十四話・銃と拳と杖と

機動六課訓練所　深夜

誰も明日を過ごす気力を体に蓄えるために、ゆっくりと寝静まる時間。

そんな静寂に包まれた時間に反逆することく、終始動き回っている若者たちがいた。

カズマは三枚の紅い羽のついた右腕を振りかざし、同じく右腕をデバイスで包んだスバルに向かって駆け出していく。

そしてスバルに殴りかかろうとした時、道というより壁としか思えないほど直角に、スバルのウイングロードがカズマのすぐ目の前に現れた。

「おわつと、」

目の前が急に青色の壁でふさがれてしまったカズマは走るのを止めて一瞬だけ立ち止まってしまう。

するとすぐさま後ろから風を切るような音が聞こえてくる。

カズマは足を止めた自分に舌打ちして後ろを振り返らずにシエルブリットで地面を殴りつけ、その反動で体を上空に持ち上げる。

その後すぐに下を見るとさっきまでカズマがいた場所に四方のうち、ウイングロードに塞がれた正面を除く三方から飛来した大量の山吹色の魔力弾が標的を失いぶつかり合っていた。

これらの魔力弾はスバルから少し離れた所にあるウイングロードに乗って、常にその銃口を標的であるカズマに向けているティアナから放たれたものだ。

「っ外した!!」

「はっ、ギリギリセーフってやつだな、“ガリガリガリ”ん？」

目の前のウイングロードを殴ってティアナの下まで跳ぼすと右腕を構える。

しかし今度は上からガリガリと何かを削るような音が聞こえてくる。

上を見るとスバルがカズマの殴ろうとしたほぼ垂直に伸びているウイングロードを落ちているかと思うほど無茶な体制で滑り、こちらに勢いよく向って来ている。

そしてそのデバイスに包まれた腕はもう込められた魔力を解き放つ

だけの状態だった。

「マジかよおい！」

「つつつつシユウウウト！！！！！」

とつさにシエルブリットを盾のように構えてスバルの拳を受け止めるが当然それだけで勢いが止まるわけがなくカズマは地面に思いっきり叩きつけられる。

スバルはカズマを殴りつけた後に別のウインググロードになんとか着地し、カズマが激突してドーム状に広がっている土煙を見下ろしていた。

「（バリアジャケット無しにカズマさん大丈夫かな、ティア。）」

「（あんたに心配されるような奴じゃないわよ、それより集中しなさい。）」

「（わかってるけど。）」

しばらくすると砂煙の所々が虹色の粒子に変わり、いきなり竜巻の

ように渦を巻き始める。

その激しい風と砂で一瞬視界が途切れた時、竜巻から弾き飛ばされたかのごとくカズマがスバルの目の前まで勢い良く飛び出してきた。今度は先ほどとは真逆、カズマがスバルの隙をつくという形になる。

「お願い、マツハキヤリバーっ」

スバルは攻撃で押し返すのは無理と判断するとありったけの魔力を込めてバリアを張る。

スバルがバリアを張ると同時にカズマはシエルブリットを展開させ、緑の閃光を生む紅い羽を一枚砕いた。

「衝撃のファーストブリットオオ!!!」

そのままカズマの拳がスバルの青いバリアとが激突する。

しばらくはお互いを拒絶するように火花を散らしていたが途端にカズマの拳が勢いを失いだし火花も消えた。

つまりスバルのバリアがカズマのシエルブリットの攻撃を防ぎ切ったのだ。

とりあえず“一撃目”は

「もう一発っ撃滅の、セカンドブリットオオ」

スバルがホツとしたのもつかの間、カズマがその体制のままもう一枚羽を砕いた。

この時カズマにとって幸運だったのはカズマの位置の関係でティアナからスバルへの援護射撃ができない状態であったということだ。

「くうううあ！」

一方すぐさまバリアに魔力を込め直すスバルだが、さすがに二撃目を耐えきる余力も有るわけも無くシエルブリットとぶつかった瞬間から青いバリアにはひびが走った。

突き破られるくらいなら、と考えてスバルは足の力を抜いた。

それにより抵抗をなくしたカズマの拳はスバルにとどきはしなかったが代わりにバリアごと遠方に弾き飛ばした。

「スバルッ！！」

「そこかああああ」

足場をシェルブリットで殴ってダンッと響きの良い音を鳴らした。そして声のした方向、つまりティアナに向かって山なりの軌道を描きながら跳んでいく。

カズマの体はティアナの背後のウイングロードにきれいに着地する。それと同時にティアナにシェルブリットと突きつけるが、もちろんティアナもただ見ていただけではない。

カズマの動きを見てある程度の着地地点を予測し自らのデバイス、クロスミラージユからのびる山吹色に輝くナイフのような刃はカズマに突きつけていた。

その結果、初動とリーチの差からカズマの拳は腕が延びきった状態でティアナの顔の前で止まり、ティアナの銃身からのびたナイフは同じくカズマの顔の前で止まった。

お互いの武器を突きつけているこの状況は、他者から見ると一見同じに見えるが実際は両者の立場はまるで違う。

カズマの腕は延びきっている、つまり拳を相手にとどかせるには拳を一旦引くか体ごと相手に当たりに行くしかない。

しかしそれはティアナの銃身からのびるナイフが邪魔で今のままでは前に動くことすらできない。

対するティアナは銃とナイフという武器の特性状、拳に対してリーチに歩^ぶがある。

さらにカズマとは違い体を動かさずとも腕をのばすか引き金を引くだけで刃か弾丸のどちらかが相手にとどく体制だ。

これはティアナのナイフがクロスミラージユの銃身からのびているため元々の腕の長さをカバーできた結果である。

「どうする、まだ続けるの？」

ティアナはこの場で勝者に最も近いからこそ言えるセリフを少し不適に笑いながら言った。

目の前の男は自分たちよりはるかに強い副隊長クラスを倒す（リミッター付きだが）ような奴だ。

その証拠にこれまでこの自主練の中でこんな状況になったことはなかった。

つまり慣れも多少あるだろうが確実に自分とスバルは強くなれているということである。

その充実感がたまらなくうれしかった、それゆえの微笑だった。

対するカズマも獣が喉を鳴らすようにくつくつと笑う。

少しずつだがカズマはこの二人に勝つのが難しくなっているように感じた。

しかもその原因が自分が弱くなっているのではなく相手が強くなっ

ているからだ。

この事実がカズマの中にある何かを揺さぶる。

ただ今はあくまでティアナたちが勝者に近いだけで勝負はついてないことは二人ともわかっている。

「で、続けるの？」

「当然っ！！」

先に動いたのはカズマだった、動いたといってもティアナの顔の前に突きつけていた拳を開いただけ。

そこからずつと拳に握りしめていた砂がティアナの顔前で舞う、早い話が一番単純な目潰しだ。

反射的に腕で砂を払いそうになるがそうもいかず、目を閉じるだけで済ませる。

ティアナはすぐに左手の銃の引き金を引くと同時に右手に持つ銃を横なぎに振るう。

これでカズマが前に近づいて来ようが後ろに下がろうが関係ない。

はずだったのだがどちらも確かな手応えは伝わってこなかった。

かといって今の所反撃してくる気配も無く、ゆっくりと目を開く。そこにはすでにカズマは居なかった。

「抹殺のっ、」

「っ上!!」

「ラストブリットオオオ」

ティアナは自分の真上から声が聞こえて来るとカズマの姿を確認する前に飛び退くように後ろに身を引く。

するとすぐに自分の目の前にシエルブリットを構えたカズマが槍のように降って来た。

それは本当にギリギリかわせたという感じで、ティアナの耳にはシエルブリットが通る風の音が聞こえたほどだ。

その後すぐに激しい揺れと浮遊感がティアナを襲う。

下を見てみるとさっきほどのカズマの一撃で足場であるウイングロードが割れ始めていた。

「嘘でしょっ!」

ウイングロードのまだ割れていない部分に向かって手をのぼすが間に合わなかった。

飛行魔法が使えずなす術もないティアナはそのまま地面に落下していく感覚に恐怖を覚え目を閉じる。

すると先ほどのばした腕が何かに引つ張られ、浮遊感が消えた。

ティアナは恐る恐る目を開いて上を見るとそこには右腕でウイングロードをつかみ、左手でティアナの腕をしっかりと握りしめてぶら下がっているカズマがいた。

「ふ〜、なんとか間に合ったな。で、まだ続けるかい？」

安堵の表情から一変、意地の悪い顔をしてカズマがティアナに問う。

「当然、て言いたかったんだけどね、というかあんた分かってて言ってるでしょ。」

「い〜や、全然俺には分かんねえな〜。」

わざとらしくそう言うとかズマはティアナの腕をつかんでいる左手を振り出す、そうすると当然ティアナの体も揺れるわけで。

「ちょっとあんた、止めなさい、本当に、落ち、止めっ怒るわよ！」

そしてこの後、二人はカズマのティアナごと抱きかかえて飛び降りるといふ提案をティアナが断固拒否したため、スバルが新しいウィングロードで迎えに来るまでぶら下がるはめになった。

／／／／／／／／／／／／／／／

「おい、いつまで拗^すねてんだよティアナ。」

地上に降りてからカズマが話しかけても　ティアナは無視を決め込んでいた。

ちなみにスバルはそんな二人の空気におどおどしている。

カズマは少しやりすぎたと思う反面、とある少女を怒らした時を思い出し懐かしい気分になる。

「だから俺が悪かったって、ごめんな、悪い^{わり}すまねえ許せ。」

頭を少し低く下げカズマは手を合わせて謝る。
その様は先ほどまで戦っていた男と同一人物とはとても思えなかつた。

「はぐ、そんなに言わなくていいわよ、これで許さなかつたらまるで私が悪いみたいじゃない。」

もちろんティアナも本気で怒っていたわけもなく、ここまで謝られると（真剣かどうかはさておき）苦笑するしかない。

空気が柔らかくなったのを感じたのかスバルが話題を提供する。

「実は私とティアアで3日後になのはさんと模擬戦をします。」

「高町のやろうとねえ、そついやあいつとは俺もやったこと無いな。やっぱ強えのか?」

「それはもうなの」「あんだ、私たちが勝てると思う?」「はさんは…」

…」

突然目を輝かせて喋り出したスバルに乱入してティアナが真剣な顔でカズマに聞く。

「何だよ、俺みたいな奴の意見が気になるのか？」

「っ、……………気になるから聞いてるんでしょ、悪い？」

「わ、私も気になります。」

「悪かねえけどよ、…喧嘩で負けねえ方法を知ってるか？簡単だ、立ちやいいんだよ。どんなにボコボコにされてもな、勝とうとしてる限り、周りが何と言おうと反逆し続ける限り少なくとも負けじゃねえ。そこから勝てるかどうかはそいつ次第だがな、」

「えっと、つまりどういうことですか？」

スバルはよく分からないといった感じで首を傾げている。

「つまりな……………勝てるかどうかはともかく、俺は相手が誰だろうとお前らが簡単に負けるとは微塵も思っちゃいねえよ、それにな、そんなこと思ってたらかんなことに付き合ってもねえよ。」

そこまで言っただけでめずらしく照れくさかったのかカズマは頬をかく、その様子を見たスバルとティアナはお互い顔を見合わせて苦笑する。恐らく思っていることは多分同じだろう。そんなことを言われたらこの模擬戦“簡単には負けられない”。

／／／3日後・模擬戦当日／／／

ヴィータやライトニングの面々、それになのはにスバルとティアナが続々と訓練所に集まる。

そして頃合いを見てなのはが全員の前に出て仕切りだす。

「じゃあ、模擬戦はスターズからだから時間までに配置に着いてね。」

「……はい。」

返事は良いのだがスバルはキョロキョロと辺りを見渡したり、数十秒単位で入り口の方を向いたり、終始落ち着きがなく、

ティアナもどこかイライラしているというか、とりあえず機嫌は良さそうではない。

「どうしたんだよ、お前ら。そんな様子だと瞬殺されるのがオチだぞ。」

その様子を見かねたヴィータがスバルに訳を聞くと、返ってきた言葉には此処に居ない人物の名前があった。

「えっと、カズマさんはどうしてるんですか？」

「カズマあゝ何でまたあいつが、まあいいや、あたしは知らねえな、カズマの事だからどうせまだ寝てんじゃねえか。」

「…そうですか。」

スバルは明らかに落胆したように肩を落とす。

「じゃあ私が呼んで来ようか？用事のついで部屋に居ただけだ。」

すぐそばで聞いていたフェイトが会話に加わる。

「でも「フェイトが良いって言うてるから良いんだよ、遠慮なんてすんな。」……じゃあお願いしますフェイトさん。」

「うん、別に気にしなくて良いよ、どのみちちょっと外さないといけないかったし。」

それだけ言ってフェイトは入り口の方へと駆けていく。

その後ろ姿をボクッと見ていたスバルの背中をヴィータがバンツと叩く。

「ひゃっっ」

「何ボクッとしてんだよ。早く行って来い。後せつかくフェイトが呼びに行っただからあいつが来るまでに負けんじゃねえぞ。」

「はい！」

一回目の返事よりも何倍もはっきりと言い放つと、さっきから自分を待っていてくれるティアナとなのはの元へと急ぐ。そしてすぐにスバルも指定の配置につくとティアナに念話を飛ばす。

《フェイトさんがカズマさんと呼んで来てくれるって、ティア。》

《……別にあいつが来ようが来まいが関係ないでしょ。》

《分かってるよ、でも言っておきたかったから。だめ？》

《勝手にすればいいわよ、……これからも。》

近くで二人と対峙しているのはにはスバルはヴェータたちの会話はもちろん、二人の念話での会話は聞こえなかった。

だがそれはまったく関係ない。

目の前の教え子たちの目がさつきほどとはまるで違う光を宿していることさえ伝わればそれでいい。

その光が良いか悪いかはまだ分からないが。

「じゃあ今から模擬戦を始めるよ。」

///
///
///
///
///
///
///
///
///
///

模擬戦を始めて一番最初に感じたのは違和感だった、はつきりとは
いえないが二人の動きにいつもとは違うものを感じ取る。

そしてその違和感は模擬戦が続くにつれて確信に変わっていった。

「うりゃああああああ！！」

スバルがウイングロードを駆け抜けてなのはに向かってただ真っ直
ぐに、まさに特攻といふべき勢いで近づく。

「だめだよスバル、そんな単純な…攻撃じゃ！」

なのはが腕をスバルの方向にかざすと魔法陣が現れる。そこから桃
色の小さめの魔力弾が5、6発放たれる。

だがそれでもスバルはまったくスピードを緩めない。

そしてスバルに魔力弾が当たるかという時、桃色の魔力弾は上方か
ら飛来した山吹色の別の魔力弾に撃ち落とされる。

それはぶつかり合って火花を散らしていたがスバルは怯まずに特攻
を続けた。

なのはは自身のデバイスであるレイジングハートをかざしてバリア
をはる。

その後すぐにスバルの拳とバリアが衝突し、何ともいえない衝撃がなのはの体を揺らす。

しかし一般的な魔導師のものよりもはるかに頑丈な彼女のバリアはスバルの攻撃を防ぎきり、それどころかスバルを体ごと弾き飛ばす。

「うわあああつ」

無理な体制で弾き飛ばされたスバルは別のウイングロードに落ちていく。

なのはもスバルがそのまま地面まで落下しないようにウイングロードのある方へとはじいたのだが体制まではどうしようもない。

彼女の頭の中で頭から突っ込んでいくビジョンが浮かんだが、スバルは見事にそれに逆らった。

まずデバイスに包まれた右腕を支点としてウイングロードに突き出し、そして足にあるローラーで独楽のように回転して衝撃を分散することによりなんとか無傷で着地する。

その動きはなのはを含めた傍観者たちを驚かす。

何故なら先ほどのスバルの動きは明らかに今ここに居ない彼を思わせるものだったからだ。

だがなのははそれを良しとしなかった。

一見成功した様に見えるその動きはまだまだ不安定で成功する確率も五分五分といったところだろう。

そもそもティアナの狙撃から下手をしたらスバルに当たる可能性すらあった。

なのはが魔力弾の動きを変えなかったから良かったもののかかなり危険を伴う攻撃で、両方が成功したのはまさに運が良かったとしかいえない。

そんなリスクな戦い方をなのははスバルたちに教えた覚えはなかった。

こんな戦い方はまるで……

ティアナの山吹色の魔力弾が複数迫り来るがなのはは重心をずらすこと無く紙一重で交わり、先ほどと同じようにスバルに魔力弾を放つ。

しかし何を思ったのかスバルは拳をウイングロードに付けたまま動かない。

「いくよ、マッハキャリバー！」

《first bullet of shock》

次の瞬間マツハキャリバーからデイバインバスターのような青い魔力が吹き出しスバルの体を上方に加速させる。

そしてそのまま魔力弾を飛び越えて山なりの軌道を描き再びなのに向かっっていく。

「あれはっ!!」

なのはは少し虚をつかれ撃墜を諦めてすぐに飛行魔法で移動しスバルの落下地点から離脱する。

その後すぐにスバルの拳とウイングロードの衝突音が響いた。

なのは先ほどからティアナの狙撃が無いことに気が付いて周囲を見渡す、そして百メートル以上離れたビルの上で砲撃のような大掛かりな魔法を行使するティアナを見つけた。

「砲撃っ、ティアナが……幻術！」

しかしすぐにそれが幻術だと察知する。
するとなのはが当たりを付けた通りビルの上に居たティアナの姿は消え、変わりに自分の上空にティアナが、下方にスバルが現れる。

今にしてみればあのスバルのパフォーマンスじみた動きはこの時までの時間稼ぎだったのだろう。

「一撃必殺つはあああつ！」

《second bullet of destruction》

「りやあああああ！！！」

ティアナは銃身から伸びた刃を突きつけ上方から、スバルは拳から再び青い閃光を吹き出して下方からなのはに向かっていく。

224

それをなのははバリアを張る訳でもなく、避ける訳でもなくただ両腕で受け止めた。

「「つつ！！！」」

驚愕からティアナとスバルは息をのむ。
そして両腕から血が出ているにも関わらずなのはの余りにも無機質な目を見て全身が硬直する。

「頑張っているのは分かるけど、模擬戦はケンカじゃないんだよ？練習の時だけ言う事聞いているフリで、本番でこんな危険な無茶するんなら…、練習の意味、ないじゃない…」

今の二人にはなのはの言葉の意味を理解する余裕はほとんど無い、

ティアナはなのはの腕を振り払い近くのウイングロードに着地する。

「私たちがやり方が危険な事くらいわかってます。……それでも私は強くなりたいです!!」

瞳に涙を浮かべながらも果敢に戦い続けようとするティアナに対してなのはは……

「少し、頭冷やそうか…」

無機質な声と瞳を向けその腕から巨大な魔力球を複数ティアナに放つ。

その魔力球はティアナが引き金を引く前に彼女に全弾命中した。

「ティアアアああああ！」

スバルの叫び声が響き渡り、魔力の光が晴れたときにはその場に倒れ伏すティアナの姿があった。

「なのはさんどうしっ！バインドっ」

なのはに詰め寄ろうとしたスバルの体をバインドが縛り上げる。

「どうしてって、そんなこともわからないの？」

ティアナには消えいく意識の中、スバルやなのはの声などまるで聞こえなかった。

それよりも全身が痛い、眠い、そして何よりもなのはの瞳に臆して最後の最後で引き金が引けなかったのが、負けるのが悔しい。

“強くなりたきや自分が思いつく一番弱い考えに反逆すりゃいいのさ”

自主練習の時にある男から一回だけ言われたこの言葉の意味がその時やっと分かった気がする。

そして今のティアナの思いつく一番弱い考えはこのまま痛みや眠気に負けて引き金を引かない事だった。

「おい、あれ……」

「どっして……」

傍観者たちから声が拳がるので何事かとなのはが振り返ると、そこには震える脚で無理やり立ち上がったティアナがいた。

「ティアアッ!」

「まだやるのティアアナ?」

「……いけないですか、私だって強くなれるって、あいつみたいに
なれるって期待しちゃいけませんか!」

意識が朦朧とする中ティアナは自らの感情をなのはにぶつける。
それでもなのはの目は恐ろしく無機質なままだった。

「ティアアナが何を言いたいのかわからないけど、ティアナのやり方

「はただ危ないだけだよ。」

ティアナはこうしている間にも気を抜くと倒れそうになる。そこで彼女のとった行動はいたってシンプル、当初の目的である引き金を引くことだった。

「これが私の、……ラストブリットオオオオオオ!!」

《last bullet of liquidate》

ティアナのデバイスから弾丸というにはあまりに巨大な、まさに砲弾というべき山吹色の魔力弾が放たれる。

それは一直線になのはに向かっていき爆発した。

だが煙が晴れて現れたのはバリアの一部にひびが入っているがダメージというダメージも無いほぼ無傷なのはの姿だった。

「分かった？、これがティアナのやり方の限界。もう終わりにしよう。」

そしてもう押せば倒れるというほどしか体力の残されて無いティア

ナに再び魔力球を放つ。

ティアナの行動は他人から見たら無駄でしかないだろうが、彼女にとってはまるで違った。

そのままなのは魔力球は爆音というべき音を鳴らし炸裂した。

しかしその音は聞こえてもティアナにはまるで体の痛みや衝撃は感じられなかった。

その後唯一聞こえてきたのはたった一人の声。

「いい反逆ぶりだぜティアナ。」

その声におもわず目を開くと最初に映ったのは背中だった。

自分と同じく山吹色の弾丸を使うという、自分たちがなれるかもしれないと期待してしまった男の背中、

ティアナは初めてその男の名前を呼んだ。

「カ……ズマ」

すると男は首だけで振り返りこつ応える。

「あいよ。」

世界に中心が有るならば、その中心に最も近い場所で悪魔と恐れられた女性

世界の果ての果て、その小さな陸地で悪魔とたたえられた少年

時空の境界線を越えて二人の悪魔がこの場を集った。

次回

魔法少女リリカルなのは s ・ C R Y ・ e d e r s

第15話・銃と拳と悪魔と悪魔

第十四話・銃と拳と拳と杖と（後書き）

自分の戦闘描写のあまりのへたくそさに嫌気がさします。

f i r s t b u l l e t o f s h o c k

s e c o n d b u l l e t o f d e s t r u c t i o n

l a s t b u l l e t o f l i q u i d a t e

は公式資料から引つ張ってきたので間違っていないはず。（打ち間違
つてなければ）

どうしても誰かのデバイスに言わせたかったんだ

第十五話・銃と拳と悪魔と悪魔（前書き）

お久しぶりですね、ホントに…

いかんせん作者は高三の身なので今年度は更新状況が酷くなると思います。

第十五話・銃と拳と悪魔と悪魔

夢をみていました

夢の中で私はあの人ではなくどこか他人とは思えない見知らぬ女の人になっていました

そして目の前にはあの人、満身創痕の女の人をかばいながらあの人、女の人（私）と対峙しています

私は心の底から喜びました

今の私にはあの人を感じることはできないけれどそれでもあの方は生きていて、今もお戦っている、それだけが分かっただけでも私の心を震わせるには充分でした

たとえそこが二度と帰って来れないほど深く暗い、遠く離れた場所であつたとしても

そして私はもうどちらか後戻りできないと分かっていても、それでもこの女の人とあの人、どちらかとも傷つかないことを望んでしまいます

何故なら女の人（私）が無表情の冷たい仮面の下に覆い隠しているあの人への激しい感情は、

怒りと

悲しみと

そして……

カズマが現れてからしばらくは皆が言葉を失いたただ静寂な時間が流れる。

そしてそれ静寂を破ったのは他でもないティアナだった。

「なんで…あなたがここに居るのよ…同情なんか……」

全身ボロボロで今にも途切れそうな声で、それに反して鋭い目でカズマをティアナは睨む。

あくまでもこの模擬戦はティアナとスバルのものだった。

しかし目の前の男は状況はどうあれそれを邪魔したことになる。も

しその行為が同情という形で行われたのならティアナはカズマを、ある意味カズマだからこそ許せそうにない。

少なくとも自分は、自分たちは力こそ及ばないものの彼の前でも後でも上でも下でもなく、隣りを歩いていると思いたかったからそんなティアナの気持ちを知ってか知らずかカズマは平然と言った。

「ちげえよ、同情なんかじゃねえ。

俺は俺のために、俺がそうしたかったからそうした、ただそれだけだ。

悪いなどこまでも勝手に。」

それを聞いたのティアナの心境を一言で表すとまさに“呆れた”だった

なんだそれとは怒る気も失せるほどカズマの言い分はまさに自分勝手なものだった。

だがしかし、これがカズマという男なのだとティアナは改めて認識する。

むしろこの男が誰かに同情して自分がしたくない事を率先して行う姿など全く思い浮かばないのだから納得するしかない。

そしてやりたいからやったというおそらく世界で一番分かりやすい理由を聞いたが、まだその目的は聞いてはいない。

……まあそれを想像するのはカズマという男を再確認したティアナ

には余りにたやすいが。

「それで、…結局あんたは何がしたいのよ…」

「おお、その事なんだがな、この喧嘩譲ってくんねえか。」

その言葉の一字一句全てがまさにティアナの予想通りだった。多分余りに分かりやすいのでこんな状況で無かったら周りを気にせず笑ってしまったことだろう。

「良いわ…でも…あいつに…スバルにケガさせたら」

「許さないってか、わあてるよ。」

それだけ言ってティアナとカズマはお互い左手でハイタッチをする、つまり交渉成立の合図だ。

そしてついにティアナは意識を失い、先ほどまでと違う安心し切った顔でその場に崩れ落ちた。
愛しき馬鹿のその側で

カズマはあえて倒れるティアナを支えようとはせずただただその様子を見守った、そして後ろを振り返り本来の目的を果たそうとす

る。

その視線の先には拘束されたスバルと同じウイングロードの上で先ほどからこちらを睨んでいるのはが居る。

「意外だな、待ってくれるたあずいぶんと優しいじゃねえか高町さんよお。」

「なんで邪魔するのかな、カズ君。私のやってること、何か間違ってる?」

ピリピリとした空気の中でしばらく無言の睨み合いが二人の間で続く、そして

「そんな事「カズマさんティアは、ティアは無事ですか!」………気絶してるだけだから別に………いや、お前次第だな。」

カズマは話しの頭でいきなり飛び込んできたスバルの問いに調子を狂わされつつも答えてる途中で、まさに悪戯でも思い付いた悪ガキのごとくをニヤリと頬をつり上げる。

そこからカズマはアルター化した右腕で気絶しているティアナの服をつかみ持ち上げる。

そして片足を浮かせてそのまままるで投球フォームのようなポーズ

をとった。

「まさか！」

「パスだスバルウウ！！」

カズマは気絶しているティアナをあるうことがバインドで拘束されているスバルに向かって投げ飛ばした。

「っつカズ（君）マさん！？」「」

そしてティアナにきれいな放物線を描きながらスバルに向かって飛んで（落ちて）いく。

その様子を見たのははとっさにスバルにかけたバインドを解除する。

そしてスバルはその自由になった両手で飛んでくるティアナを全身を使ってなんとか受け止める事に成功した。

その様子にホツとするのはだが、後少しでも自身がバインドを解くのが遅かったらどうなっていたか分からない、そう思うと怒りがふつつつと湧き上がり正面を向く。

「カズ君、何を考えてつつつ!!」

しかし正面を向いた時、目の前にはすでに紅い羽根を緑色の閃光に変え、右腕を振りかざそうとする少年がいた。

「ファーストフリット先手必勝おお!!!」

なのははなんとか拳が当たる前にバリアだけ張るが衝撃を殺しきれずウイングロードから弾き飛ばされる。

代わりに先ほどまでなのはが居た場所にカズマが着地した。

「少し外したか、にしても硬えなあいつの壁」

投げ飛ばされたからなのかうなされ続けているティアナを抱えたまま、その様子を見ていたスバルが一言もらす。

「……今のはちょっとずるくないですかカズマさん」

「いいんだよあんくらい、寝てるとこ襲うよりまだマシだろ、それより今すぐそいつ連れて早くこっから離れる。ありや絶対怒らせた。」

自分たちが原因で始まったであろう戦いの中本当に逃げてしまつていいのかという気持ちもスバルの中にはあつたが、傷ついて意識を失っているティアナをこの場に置いておけるはずもなく、スバルは素直に頷いた。

「はい、……………あのカズマさん。」

しかしスバルにとっては憧れ続けている女性と目標に成りつつある少年が戦うのである。それもこんな最悪の形で。

「何だ、」

「ケガだけは、あまりしないでください。」

スバルもこの喧嘩がそんな生易しく終わるわけないと分かっているがそう言わずにはいられなかった。

その言葉にカズマはほんの少しの間だけ優しくも悲しい眼をしたがすぐに元に戻り、前を向き直した。

「おう、あんま自信ねえけどな、お前こそ転んだりしてそれ以上傷増やすなよ、俺がそいつに怒鳴られる。」

「はい??」

スバルは首を傾げながらも了承するとカズマに背中を向け、ティアナを背負いながらウイングロードを降りていく。

すると前方から桃色の魔力弾がスバルの方へ飛んでいこうとしていたのを見つけたカズマは、ウイングロードを右腕で殴りつけて移動し自身の体を無理やり軌道上に割り込ませて魔力弾をはじく。

「だからよ、ケガさしたら俺が怒られるつってんだろつが。高町さんよ」

そう言うと飛行魔法を使ってなのはがカズマの前に現れた。

「どうしても退^どいてくれいんだね、カズ君。」

「退く?俺が殴った時から喧嘩は始まってんだぜ、なんなら今すぐ退かしてみろよ。」

「わかった、……ならそうする!!!」

すぐになのはの周りに大量の魔力弾が現れ、わずかに時間差をつけ

ながら一斉にカズマに向かって飛来させる。

カズマはすかさずシエルブリットでウイングロードを殴り自らの体を跳躍させ魔力弾を交わす。

しかしその時にはすでにそれを見越したなのはが自らの愛杖であるレイジングハートをこちらに向け、今にも砲撃を放てる体制で待ち構えていた。

それに対してカズマは待つてましたといわんばかりの狂気地味た笑みで応える。

片や桃色の閃光を相手に、片や緑色の閃光を相手と逆の方向に各々の意志を込めて解き放った。

「撃滅のセカンドブリットオオオオ!!」

「デイベインバスタアアア!!」

なのはの砲撃とカズマの拳の衝突は激しく辺りに稲光を巻き起こす、たとえ近接型と遠距離型の違いは在れどどちらもその圧倒的なパワーで相手をねじ伏せるタイプ同士のぶつかり合いなのだからその破壊力は余波だけでも凄まじいものだった。

しかし意外にもこれは長くは続かなかった。

最初になのはが放ちカズマが避けた魔力弾が進路を大きく旋回して

再びカズマに向かって飛来してくる。

当然なのは砲撃に集中していたカズマは右腕で防ぐこともかわすこともできず、魔力弾の直撃を喰らうしかなかった。

「がふああつ」

不幸中の幸いかその衝突の勢いでデイバインバスターの斜線上から外れ、無防備な状態からの砲撃の直撃だけは避けることができた。

だが推進力を失ったカズマが地面に向かって落下しているのは変わらない。

そしてそれを黙って見ているほどなのは未熟でもなく甘くもない。そこからさらに大量の魔力弾を魔法陣から出現させ、点ではなく避けようのない面状に落下中のカズマに向かって叩きつける。

なのはの魔力弾は地面を揺らし、大量の土埃を巻き起こす。

しかしそれは三秒も経たずに虹色の粒子に変わり辺りにドーム状に四散していく。

そこからひびの入ったシェルブリットを掲げ、最後の紅い羽根の碎きながら虹色の繭を突き破るかのようにカズマが勢いよくなのはに向かつて飛び出した。

「抹殺のっラストブリットオオオオオオアアア!!!」

声を荒立てるカズマに対しなのははあくまでも冷静に先ほどよりも効果的であると思われる攻撃にでる。

「クロスファイアシュート」

その掛け声と共に複数の巨大な魔力弾が現れカズマを正面からではなく四方から襲いかかり着弾と同時に爆発した。

「んなもんで、俺が落ちると思うなああああ」

しかしなのはの予想に反して魔力弾を喰らってもカズマの勢いは死んではおらず、大部分の装甲が砕けたシエルブリットでバリアごしになのはを殴りつける、

だが着弾時の爆発によってその威力は目に見えて下がっており、なのはのバリアを砕くことなく止まってしまふ。

そのまま空中で無防備になったカズマをなのはの砲撃が再び襲いかかるが、それはとっさに近くのウイングロードを右腕で殴ることで地面に移動しなにかかわす。

}} モニタールーム }}

大量のモニターが存在するここにはスバルだけではなく、訓練所で直接観戦していたヴィータたちも巻き添えをくらわないように避難して来ていた。

そして部屋中には今もリアルタイムで大画面でカズマとなのはが戦っている様子が映し出されている。

「なんだよカズマの奴、まるで一方的じゃねえか。」

ヴィータの漏らしたその言葉にスバルはビクツと肩を揺らし画面を食い入るように見つめるが、今はモニターも巻き起こされた煙りしか映っておらず二人の内どちらも確認することが出来なかった。

「だがあいつにはもう一つ上のあれがあるのだから?」

いつの間に来たのか訓練所の時点では居なかったシグナムがヴィータの横で応える。

「うお、居たのかシグナム、お前たしか腹殴られて内臓破裂がどうのこうのって」

軽く驚くヴィータに言われてシグナムは急に顔をしかめ始め、片手

を腹の方へ置く。

「思い出させるな、今でもまだ動くと相当痛いんだ」

「それは病室を抜け出してくるお前が悪いだろ、てかお前のいうカズマのあれってあのオレンジ色の奴か？」

「……お前は見たことがあるのか」

「見してくれって言ったら普通に見してくれたぞ、ってなにさっきより怖い顔してんだよシグナム。」

「いや、腹が痛いだけだ。」

「そ、そうか。にしてもフェイトの奴もどこ行ったんだ？」

〳〳訓練場〳〳

激しく凄まじい戦闘によって周囲に張り巡らされていたウイングロードはほとんどが砕けちり、平坦に均されていた地面も度重なる衝撃でいびつに地形を変えて最早その面影すら残っていないかった。

そんな場所にボロボロに成りながらも大地に拳を突き立てながら立ち続けている男が一人

そんな男を上空から見下ろしながら悠然とその手に持つ杖の先端を男に向ける女が一人

「ククク、ハハハハハハハハハハ」

少年が、カズマが突然狂ったように笑いながら拳を地面から離し、猫背の状態から完全に直立に立ち上がる

その様子に女は、なのはは動じる事もなく最初と変わらぬとても冷たい目で見続けるが、カズマはまるで気にする様子はなくそのまま続ける。

「嬉しいねえ、今のままじゃ勝てない、そんなでもって俺も目の前にいるそいつもまだ手を抜いてるときたもんだ、マジの喧嘩にしない理由なんかまるでねえ!!!」

「カズ君は、カズ君は喧嘩がしたいからあそこで割り込んできたの？だから私の邪魔をしたの？」

「ほとんどそんなところだよ、後は少々ためえのやり方が気に入らなかつた、それだけだ、
さあウダウダ言っつてねえでやろうぜ喧嘩を、俺とお前のマジな喧嘩をよお」

その瞬間カズマの体が一瞬だけ虹色に発光したかと思うと閉じ続けていた右目が開いた。

そしてボロボロの右腕を天に向かって突き立てる

「シエルブリットオオオオオオオオオオ!!!」

その声と共に掲げた右腕と周囲の物質が虹色の粒子に分解され螺旋状に渦巻きながら右腕があつた場所に集まる、それが山吹色の装甲と成つて新たな右腕と肩に付いたフィン、さらに右目の周りに鬚たてがみのような飾りを形作る。

その新たな右腕の装甲が展開し手の甲から金色の光が吹き出し肩についたフィンがカズマの体を地面から浮かすほど高速で回転する。

「さっそくいくぜ高町、シエルブリットオバーストオオオオオ!!!」

フィンの中心から金色の閃光を吹き出し先ほどまでとはまるで違う

加速で迫ってくるカズマに対しなのはは冷静に様子見としてデイバインバスターを放つ。

そして桃色の閃光と金色の拳がぶつかり合ったが、あろうことか桃色の閃光は少しも拮抗することもなく金色の光に飲み込まれていく。

「っそんな!？」

ここで初めてなのはを顔から冷徹さが消え、焦りが垣間見える。

そして本能的なのか経験からなのかは分からないがなのはの体ほとんど無意識の内に数歩分だけ後ろに飛行していた。

次の瞬間、目の前を下から上に金色の光を放つ何かが駆け抜けた、自身が張った強靱といえるバリアをいとも簡単に砕きながら。

その正体が先ほどのカズマだと理解するのに時間はかからなかった。何故ならそこには肩にあるフィンを使って空中で静止し、なのはがそうしたように今度はカズマが上空から見下ろしていたからだ。

「さあ出せよお前も次のを、俺に本気の“高町なのは”を見せつけろ。」

こう言われればなのははそうするしかない、おそらく今のカズマに攻め続けられるとあつという間に撃墜されてしまっただろうとなのは

思わせるほど劇的な力の上昇だった。

それほどまでに今のカズマとなのはでは扱っエネルギーの桁が違う。だからこそ対抗するなのはも桁を上げなければいけない、本来の桁に。

カズマがそれを待っているということは彼の中にある目的がもう単純な勝利だけではなくなっていることを示している。

「レイジングハート、緊急時のリミッター解除をお願い」

《しかしあれは体への負担と回数制限が》

「お願いレイジングハート……カズ君じゃないけどこんな機会、これを逃したらもう無いかもしれない」

《……了解しました》

恐らくレイジングハートが人の形を成していたらため息の一つでももらしてやれやれとポーズをとった事だろう。

いつだって最後に決断するのは自らの主人である。だからこそレイジングハートはその主人の道具として最高の仕事をすべく術式を構築していく。

なのはが目を閉じるとその後すぐ体の周りに複数の魔法陣が次々と現れては消えていくのを繰り返す。

そして最後に残った大きめの魔法陣が消えた後なのはは目を開けた。

ただそれだけで見た目にはまるで変化は見当たらない。

だがその目を見たカズマは全身の毛穴が開ききったような感覚を覚える、先ほどまでのどこか抜けた力ではない彼女本来の力を全身で感じる。

それほどの相手を目の前にしてもカズマの中にある感情は恐怖では無くそれとは真逆の感情、歓喜だった。

「シエルブリット」

カズマのシエルブリットの装甲が展開し手の甲から眩いばかりの光を放つ

「デイバイン」

なのはのレイジングハートの先端に魔法陣が現れそこに桃色の魔力が集まっていく

「バ（スタアアアアア）アアストオオオオオ！！」

そして再び桃色の閃光と金色の閃光がぶつかり合う、

今度は割と拮抗し合った両者の攻撃だがまだカズマの方が強いのか
少しずつだがなのはの砲撃を押しつけて前へ前へと進んでいく、

なのはもそれはある程度予期していたのか全く慌てずもう一方の空
いた腕から複数の魔力弾を放つ、それはやはり大きく旋回してカズ
マの方へ向かっていく

「チツ、またあれかよ」

カズマはディバインバスターの斜線上から抜け出すと空中で回転し、
肩にあるフィンの羽根を使って魔力弾を弾いた。

するとその後も砲撃ではなくやけに直線的な魔力弾が連続で飛んで
来たので空中を滑るように移動してかわす、もちろん右腕に光を溜
めていつでも拳を振るえるようにしながら。

しかし妙だと思いつと見てみるとなのはの持つ杖の形が槍のように
変わっており、今までになく巨大な魔法陣を展開していることに気
が付いた。

そして次の瞬間カズマの体が桃色の光の輪によって拘束される。

「!?!?なんだよ、これっ」

「これで終わりだよカズ君、スターライトトゥブレイカアアアアアア
!?!」

カズマの動きが止まったと見るやすぐになのははレイジングハート
を振り下ろす。

そして圧倒的な大質量を持つ桃色の砲撃が杖の先にある魔法陣から
放たれ、この部屋ごと飲み込む勢いでカズマに襲いかかる。

なんとか直撃する前にカズマは右腕に掛かっていたバインドを引き
ちぎるが、砲撃はとても避けられそうになかったので（もとより避け
る気はあまりない）金色の光を込めたその拳で桃色の閃光を殴り応
戦する。

しかし拳の先から伝わってくる重圧は先ほどまでの砲撃とは桁違い
で、金色の輝きは桃色の光に打ち消されていく。

その力の差はモニタールームの画面上でも辺りは桃色の光で埋まり
金色の光はほとんど確認出来なかったほどだ。

そしてカズマは砲撃に飲み込まれることはなかったがどんどん進
行方向とは真逆の壁の方へと押し戻されていった。

その様子を見てある程度余裕のあるのが溜め込んでいたものを
吐き出すかのようにカズマに向かって叫ぶ。

「どうしてなの、私はあんな危ない事を教えてるためにカズ君にデアナ達の事を頼んだ訳じゃ無いのに！」

「そんな事まで俺が知るかあ！、だいたい頼んだんなら途中で文句言っでんじゃねえ！！」

カズマのシェルブリットの装甲に少しずつだがひびが入っていく

「私はあの子たちに昔の私みたいになつて欲しく無いから！！、傷ついで欲しいから、だから」

「てめえの昔なんか知るかってんだ、あいつらが傷つきたくないって言ったか、
傷ついででも強く成りてえつて言っただらうが、」

右腕のひびは広がり一部の装甲が剥げてその下の漆黒に変色した皮膚のような部分が見え始める

「そんなの間違つてる、そんなやり方じゃいつか取り返しのがないことになる！傷ついてまで得られるものなんて何も無いのに」

とうとう壁まで追いやられたカズマだが壁に垂直に脚を付き、フィ

ンを限界まで回して桃色の閃光を押し返そうとする

「決めつけんな！」

お前と一緒にするな！

それにな、過去に縛られてるてめえが勝手にあいつらを測ってんじやねええ！」

そこでカズマのアルターに奇妙な変化が起きる。

なのはの猛攻を受け続けている右腕は半透明に点滅し出し、アルターで再構成された右目には此処ではないどこかの風景が映る。

だがカズマはそんなことは微塵も気にせず唯一残った動かせる部分である左腕の拳を握りしめ、そしてそのまま目の前で光り続ける閃光に叩きつける、

するとカズマの左腕はまるで意思を持つかのようになのはの魔力自体を分解して、右腕と対を成す新たな山吹色の装甲に生まれ変わった。

「やっと掴んだ、シエルブリットツツバアアストオオオオオオオ」

獣の雄叫びのような叫び声と共に金色の輝きは二倍以上に膨れ上がり、一对の拳を掲げたカズマはまさに弾丸のごとく加速して目の前の桃色の閃光を突き破り、なのはの目前まで駆け抜け停止した。

「っ！？、レイジングハート」

このまま自分が勝つといった予想を遥かに超えた展開に驚きを隠せなかったが、なのはは体制を立て直しつつ飛行魔法に使わない残り全ての魔力をデバイスに注ぎ込み、その強靱たるバリアを作る。

一方のカズマは新たに再構成した左腕は彼の意志に反して勝手に元に戻ってしまったがまるで気にすることなく、装甲の殆どが砕けて残っていないほどポロポロで黒い皮膚と赤い血管のような模様がむき出しになった右腕を振りかざす。

「これが、俺が傷ついたすえに掴んだ、弾丸だああああああああああああ」

その雄叫びと共にカズマの拳がなのはのバリアに振り下ろされ衝突する、

そして数瞬後、激しい光とかん高い音を鳴らしながら双方が最強の矛と最高の盾のごとく共にあっさりと砕け散った。

なのはのバリアはまるでステンドグラスのように美しく四散し、カズマの右腕は肩から先が砕け散り血の代わりに虹色の粒子が辺りに零れ落ちる

それを別室で見守っていたほとんどの人間は、決着がつきカズマのその目について諦めの色が宿することを疑わなかった。

しかしカズマは止まらない、自身の唯一無二の誇りである拳を砕かれようと止まらない、止まる気などさらさらない。

カズマの右肩から流れ出ている今まで右腕を形作っていた虹色の粒子が、アルターが解けたことにより再び収束し彼本来の生身の右腕に再構成されて、

そのカズマの拳がここで初めてバリアジャケット越しとはいえなのは胸元に直接打ち込まれた。

生身の右腕といってもそれはアルターを意識的に使っていないだけであり、常時アルターに浸蝕されているその拳の威力は凄まじく数秒だけならなのは意識を刈り取るには十分だった。

そして意識の無いのはもちろんのこと、アルターを解除したカズマもそのまま空中にとどまれるはずもなく、

二人の体は重なり合うように重力に引かれて地面に向かって落ちていった。

そして数分後、気が付くとカズマはまるでなのはを押し倒したような形で地面に倒れ込んでいた。

「……………シャレになんねえよな、さすがにこれは」

カズマは数秒後に痛む体を酷使して気を失っているのはの上から退いてその場に座り込む。(数秒かかったのは体に疲労が溜まっていただけでやましい気持ちなど断じて無い)

そこでふと自分となのはにはあの高さから落ちた割にはダメージが無い(特になのははカズマの下にいた)ことと、地面が少々丸くへこんでいることに気が付いた。

なのはの服装が普通よりはるかに頑丈だということは知っているが、さすがにそれだけではあの衝撃を防げないだろう。

カズマは摩訶不思議なしゃべる杖レイジングハートが何かしたのかと思い試しに話しかけてみた。

「おい、高町の杖、お前が何かしたのか？」

《確かに私がマスターの魔力を使って衝突までにバリアを作りました

た、

あなたがバリアの中にいたのは偶然ですし、マスターの上で目覚めた時にあなたのバイタルが通常よりも高かったことも報告します。》

「駄目だ、悪い全然何を言ってるのかわかんねえな」

《oh、》

レイジングハートは皮肉も込めてカズマの問いに答えたが、残念ながらからデバイスのしゃべる言葉は基本的に英語？なのでカズマには一切通じる事はなかった。

(スバルのfirst bullet of shock、ティアナのlast bullet of liquidate等も当然のごとく全く聞き取れてない)

「あれ、ここは……」

その時意識を取り戻したなのはが、あお向けのまままで弱々しく言葉を発する。

《mast「起きたか高町。」「…》

「カズ君、そっか私…負けちゃったのかな」

《そんなk「お前がそう思うんならそうなんだろつよ。」……oh》

「ははは、悔しいな本当に……ねえカズ君、私のやり方間違ってたのかな？」

「さあな、けどあいつらもガキじゃねえんだから自分のやり方を見つけて勝手に歩いて行くだろつよ、お前だってそうだったんじゃないかねのか」

その言葉になのはは黙り込む、確かになのはも自分が歩んで来た道は過去の事故を含めて全て自分が自分で選んだ結果だとはつきりと言える。

だからといってけして易しくなくむしろ危険を伴う道を選ぼうとしていた教え子を黙って見ていることはなには出来なかった。その道の苦しさを知っているのはだからこそ

「それによ、本当に危ない時はお前や周りが手を貸してやればいいじゃねえか。お前らが忙しい、そんでもって俺が暇だったら俺も手伝ってやるからよ。それじゃ駄目か？」

それだけ言ってカズマはゆっくりと立ち上がる、そしてなのはに立つようにと左手を差し出した。

その服装はボロボロで特に右腕の周辺は袖自体がもう無く、右腕から首にかけてまるで回路のようにはしっているアルター痕と、右手の甲の肉を突き破って生えている金属の装甲が隠されることなく露わになっていた。

その姿を見たのはは聞きたい事がたくさん頭の中に思い浮かんだがあくまでもそれを口にするのではなく、ただいつか彼の口から話してくれる事を願った。

「ううん、駄目じゃないよ、でも本当に危ないと思った時は」

「ああ、お前の好きにしな、また喧嘩するはめになるかしんねえけどな」

なのはは本当にギリギリまでティアナとスバルのやり方に付き合ってみようと思う。

かつて周りからそうしてもらったように、今度は自分がそうしよう。

そして差し伸べられたカズマの左手に自らの左手を重ねようと、

「確保や」

なのはがその手を取る前にカズマの体が横からものすごいスピードで飛来してきた白い人影に弾き飛ばされた。

「がつ!?!」

「カズ君!?!」

カズマの体は横なぎに吹き飛ばされるが、その白い人影も止まることなくカズマとの距離をあげぬように同じ方向へ高速で飛来し続ける。

カズマが地面に足を着け体制を立て直す頃には白い人影はカズマ周囲を高速かつ不規則に移動しながら黄色い魔力弾を放ち攻撃し始めていた。

その白い人影はカズマには何がどうなっているのかまるで分からなかったが、その場に居るのはやモニタールームに居るヴィータたちには“誰が”何をしているかすぐに分かることが出来た。

くしくも何故このような行動をしているかはまるで理解出来なかったが。

そして高速移動しながら放たれる魔力弾は着々とカズマの残り少ない体力を削り取っていく。

だが速すぎる移動速度のせいがある一定の間隔で白い人影が自分の目の前を通り抜けることにカズマは気が付き、一か八かそのタイミングで生身の右腕を突きつけた。

カズマの右手は空振りすることなく確かに何かを掴み取ったのだが、その手に持っているのはただの白いマントだけで人影はなかった。

その事実気付くと同時にカズマは後ろを振り返る、するとそこには黒衣のバリアジャケットに身を包み、デバイスからのびる自らの魔力で練り上げた大剣を今にも振り下ろさんとするフエイトがいた。

「じゅめんね。」

僅かに悲しみを含んだその声と共に大剣は振り下ろされ、目の前少年の意識を完全に刈り取った。

マニュアル2577番

次元漂流者もしくは何等かの形で管理局に属する民間人が局内にて過度の問題を起こした場合、拘束した後保護対象からの除外及び民間協力権の剥奪を行う

第十五話・銃と拳と悪魔と悪魔（後書き）

いや〜前書きでも言いましたが本当に久しぶりの更新ですね
3ヶ月ですよ、3ヶ月つていったら一年の四分の一ですよ

正直もう更新されないと見切りをつけた人も少なくないでしょうに
……読んでくれる人にはホント感謝です

一応最終回までの流れはぼんやりと頭の中で出来てるんですが何年
かかるんだろうか

次の話で取りあえず第一部？は終わるかもしれません。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0787o/>

魔法少女リリカルなのはs.CRY.eders

2011年10月6日23時38分発行